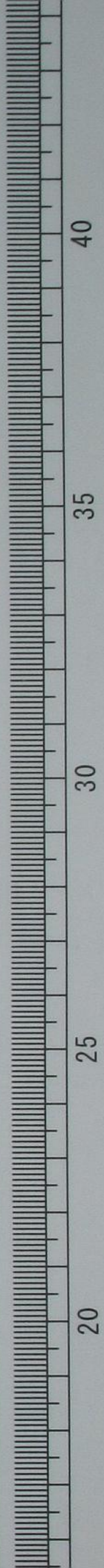


常山紀談

十五六

113
561
8



413
561
8

常山紀談卷之十五目次

一 伊勢國阿濃津城軍の事 附 佐治縫殿の事

一 長束大藏大輔降参の事

一 渡邊才兵衛武功の事

一 石田三成生捕りの事

一 小幡助六郎忠死の事

一 河村権七郎の事

一 加藤清正の北北方大坂を忍びおれぬ事

一 浅井躰合戦前田丹羽の将士功名の事 附 松平久兵衛軍學

一 鍛煉の事

一 山田勘六郎討死の事

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

十五目次

- 一 黒田如水凶相の馬に乗まらざりし事
- 一 黒田大友石垣原合戦の事
- 一 三宅喜藏武勇の事
- 一 肥後國宇土城攻杉本次郎今夜討の事
- 一 福岡家の士大将 東照宮を拜さるる事
- 一 加藤清正治亂を論せし事
- 一 黒田如水豪氣の事

常山紀談卷之十五

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○毛利秀元吉川廣家富田信高の阿濃津の城を攻る時城兵
 城の乾れ隅に有る伽藍を焼拂ふ所は俄に風が吹きて焔
 を城に吹かくる寄手是に乗じていざお破んとて宍戸備
 前守隆家先がけして攻入りてを分部左京亮政壽城中に
 加勢有し切つて宍戸と戦ひ互に痛手負しり信高本
 丸の大小よすみお鎗を合せく相戦ふかゝる如く容顏美
 しき武者緋おの物具中二段思草よておのりしを
 着鎗を提来りて富田が矢面よ立あさぐり支へ戦ひしり
 中川清左衛門といふ者かゝる富田門に入る時かの武者を認めれば

殿ハ恙なくくくくせめめめ討死とすく形ハ女ありとも
男よおとくべきやとて知らひしものあをすバ信高の北北
方たあり 信高の北北方ハ 信高の女
今日の有根きくくひまきくくくと云あへり其後高野の木食
上人和平を取討ひ信高城を知くく程たのく

東照宮伊豫の守和島くく十万石下賜りりり
佐治維殿ハ近江甲賀郡伊佐野村の人あり父を左京と
りふ秀吉の為く城を落さく流落して縫殿九つの歳
富田信高は仕へ十四まで四百石あへらまきり津の城は
籠る時十六歳名を善大夫と云り八月廿四日京口清
嵐寺の三北丸焼拂ひ敵攻入りくを防ぎ戦ひく信高

本丸は引取くくくく分都丸京亮もいまき来らば家老
物主もあきされバ信高天守より上を自害せんとして物具を
脱佐治は汝々錯せく下知せられくをわらふくく
分都富田五郎右衛門同主殿上田吉之元も二の丸は引退く
体んえくくバ信高上帯をぬす一佐治を天守より使は
やまきり大手の門矢倉廣間の茶屏重門の丸あり
毛利秀元の士紫をろかけくく其外五六人と上田吉之
元鎗を渡り合居くくく又も仍鎗り詞をかけて敵を追
きくくはらうけく敵大手の門くくへ引退くを追つめ
兩人まで討たくく信高天守よりあきまきり後城小
ころくまきり時きまきり甲曹と白河原毛なる馬は小

鞍といへる作の鞍轡を添て佐治と共へらる其あけけ
年佐治富田此家を知く菟前中納言秀詮と仕へ其家
滅びく黒田の家と仕へるを富田禁錮せしむるが大坂
陣の後藤よりのうまきと士三十騎の將となり五月六日
道明寺の軍と寄手此物色をんんとて谷川をちりよる
処より東より来る物見武者よりききひ即討ちて首首を以
しり是後藤の手の一番首なり後藤が旗本敗れ敵
お隔らる九山の細腰少くを合せ敵一人討ち首
刀を添分捕し首も首も棄てり敵慕ひ来り
りまじ大坂へ引取事叶ふ討死せんとしてかけ物を
伴野次左衛門佐竹安大夫本多小右衛門もつとて鎗を合

せんとするは深田より敵かきり兼しり伴野いぎ是まで
よしとく佐治をくく引返し道明寺と平野の間にて
真田は仍あひく道を得り其後流落し仕へを求め貪
しりして江戸柳原の町家れり少むるりの所をかりて
妻と二人ありけるが京都と赴く妻殊よあそむるを
アしと近隣の老いも心を付ていしり日を送るし
いうたす事わく京よハゆるしとぞと向ふ池田の御家新
太郎少将の禄千石賜らんとの事なるとも二千石ありバ
奉公さへしとく其よめ小京へ従しりと答るを聞て千石
むくと異名してあきくしりし程たかく従者十人
むらり引具し馬を乗りきりびやうある士来り吾ハ佐

治なりとて妻を迎へ近隣の者よそもつゝ土産し妻を

心付し礼を述て池田の家より仕りて去り

○関ヶ原の軍敗まりりば長東大藏大輔正家江州水口の城よ

引こりしを國清公船戸帶刀を使として降参を勸め

船戸是ハおなまゝ人然るべしと辞しやうも汝とく

行向へよと仰らるるハ船戸方三四寸計の小鉄の板を造

らせよと返入る水口は仍長東よ降参あは士卒も

別の事いふ此旨よくやせとやなりといふは長東阿濃津の

城攻して関ヶ原よさせ軍もせど口懐くはさるハ此城を枕

よせんとものおも存るやたなり然るは降参せんハ恥辱

よせんといふは船戸長東がかゝの士を懐く懐より鉄の板

取出し焼て多りゆへ三左衛尉が詞今かくし不偽あり印

小鉄火をとりく見せやさんといふ切しる体げもい

つりなりとびりしハ長東感してきとて人あむりて

いふあ人もかなし汝が志とておとひるはよよりと

降参せんすまゝは是ハ見苦しき物ゆへどもあゝと

とく真宗の脇指をゆへりり船戸尚座を立ざりし

うば長東小姓をよんぞ硯えか降参さるまじよのまを

船戸よゆへりりば船戸帯刀長東城をゆへりりバ警

固の兵を入らまじや

○佐和山の城をかゝむ時堀尾信濃守通暗渡邊喜兵衛を

呼ぶ凡城を攻るよ敵の虚实土地の要害具よ知らせ

叶ふまどいりしとて生捕をせむや汝事よくせんやと
えまこれバ渡辺首を取じふ易うとて生捕せん事
叶ひぐうとやもたてぬは渡辺が弟才兵衛進出殿の仰
は何とてさ六のひらびら喜兵衛年老より軍令を司る
ハ然るべーかゝる力業ハ才兵衛は仰付らまよとてハ喜兵衛
思慮あら事あやそ無禮なりといふを通晴大志壮力人の
及びぐう事をもなり得べき眼ざしよと才兵衛を称せ
らまうバ才兵衛座を立ちり兄の詞ハ禮義なり汝が詞
ハ血氣なりと人々戒めくまじも吾思ふ子細あまバ
とて夜の更るを待て従者一人お連ひそらに城際よまのび
ゆく茂るる葉の木れ下よさやく者あり近くありてそ

まのぶきと二人鎗とらうかゝるを才兵衛一人ハ突伏せ
一人ハ追ちり首を従者よめせ城は忍入く生かす
事萬一ツなり此有様を足は後まこと云く堀は添く
西は夜更りするもわくく打る其跡よつりもやバ
あり顧て名乗まこと弓は箭をつぐ才兵衛小声は敵の
忍び後より来るぞ爰は待くおんとつひつあもみより
一丈けよなうりる時鎗を取のべく敵の弓弦を突切く其
傍鎗を取直し諸膝を打伏せ上よ争あかり汝よく聞
よ吾殺さんよハあはてあうくの子細有く忍び来り
よ行あひは八天のあすけなり汝死んとなバ吾汝を刺
殺して自害せんそまハ益なり吾は随ひ来まよといふ彼士

奴心く既^ニ斯成^カ上^ハ命生^イんと名^ナらんやと^ト疾刺^{トク}殺^{コロ}
されよと云^イ才鳥^イ樹^ク々^々二人^ニ命^イく死^シんより生^イく功^コあ
らんこそよ^ク軍神^イも照^セ覧^{ラン}あれ吾^コ偽^イなま^マよと^トバさ
らバ^イら^ムもせよと云^イ才^イ我^ニ悦^{ヨク}んで引^ヒ起^キ一^ヒ物^{モノ}具^スは付^キ
塵^{チリ}を打^ウ拂^フひ^マま^マバ彼^カ士^シあ^ラま^マは^ハ大^{ダイ}剛^{コウ}の人^ノま^マて^テ志^シら^ウと
弁^{ベン}舌^{ゼツ}明^{メイ}ら^ナりか^カめ^メられぬ^ヌま^マと^ト取^ケと^ト八^{ハチ}咫^ツ名^ナ松^{マツ}田^タ大^{ダイ}
久^クと云^イと^トの^ノえ^エと^トは^ハ才^イ我^ニ樹^ク松^{マツ}田^タを^ヲ先^{サキ}ま^マて^テ始^シ首^{ウチ}を取^ル
し^シ所^{トコロ}は^ハ行^{ユク}バ^バ從^ジ者^{シヤ}も^モ我^ニ我^ニも^モ追^{オウ}つ^ツて^テ出^デる^ルを^ヲ歸^カられ
び^ビと^トの^ノ才^イ我^ニ我^ニも^モい^イふ^フま^マへ^ヘる^ルや^ヤ松^{マツ}田^タハ^ハ逃^ニげ^ケる^ル人^ノも^モあ^ラず
い^イも^モ汝^ニ付^キそ^ソひ^ヒ居^キよ^ヨと云^イく^ク城^{シロ}の方^{カタ}は^ハゆ^ユく^ク所^{トコロ}は^ハ我^ニ我^ニも^モ歸^カれ
ま^マへ^ヘる^ル逢^ア生^イ捕^トを^ヲし^シて^テこ^コそ^ソゆ^ユと^ト云^イ城^{シロ}門^{カド}ハ^ハ固^{カタ}く^ク閉^トじ^ジら^レ

兄弟^{ケイテイ}打^ウつ^ツ歸^カり^リか^カく^ク中^{ナカ}通^{ツウ}晴^{ハレ}ゆ^ユく^ク事^{コト}をも^モ志^シ
し^シよ^ヨと^ト一^{イチ}同^{ドウ}ふ^フと^トみ^ミあ^アへ^ヘり^リ生^イ捕^トハ^ハい^イう^ウよ^ヨせ^セん^ンを^ヲ
東^{トウ}照^{シヤウ}宮^{キウ}心^{シン}は^ハ任^ニせ^セよ^ヨと^ト仰^{オウ}あり^リ才^イ我^ニ樹^ク松^{マツ}田^タは^ハ才^イ我^ニ樹^クを^ヲ先^{サキ}死^シ罪^{ザイ}な^ナら^ラず^ズと^トい^イ
な^ナり^リ松^{マツ}田^タは^ハ腹^{ハラ}ま^マを^ヲせ^セられ^レ臣^{シン}先^{サキ}死^シ罪^{ザイ}な^ナら^ラず^ズと^トい^イ
と^ト勇^{ユウ}有^{アリ}又^{マタ}な^ナま^マけ^ケ有^リと^ト松^{マツ}田^タも^モゆ^ユく^ク事^{コト}を^ヲ
○田^タ中^{ナカ}兵^{ヘイ}部^ブ大^{ダイ}輔^フ吉^{キチ}政^{セイ}石^シ田^タを^ヲ生^イ捕^トよ^ヨせ^セま^マし^シが^ガい^イと^ト懇^{コン}懇^{コン}は^ハ會^エ
釈^{シヤク}して^テ数^ス十^{ジュ}萬^{マン}の^ノ軍^{イク}兵^{ヘイ}を^ヲひ^ヒき^キお^オら^ラま^マし^シ事^{コト}智^チ謀^{ボウ}の^ノゆ^ユき^キ
ま^マり^リと^ト中^{ナカ}兵^{ヘイ}部^ブ軍^{イク}の^ノ勝^{シヤウ}敗^{バイ}ハ^ハ天^{テン}の^ノ命^{メイ}より^{ヨリ}バ^バ力^{チカラ}は^ハ及^キび^ビぐ^グ
と^ト禮^{レイ}義^ギ正^{テイ}し^シら^ラる^ルを^ヲ三^{サン}成^{セイ}打^ウら^ラる^ルひ^ヒ
三^{サン}成^{セイ}此^{コノ}時^{トキ}坐^カ上^{ウエ}の^ノ楹^{ヒシラ}は^ハより^{ヨリ}か^カり^リゆ^ユく^ク田^タ兵^{ヘイ}と^トい^イ
か^カ如^ニく^ク此^{コノ}時^{トキ}も^モ田^タ兵^{ヘイ}と^ト云^イく^ク常^{ツネ}お^オ替^カら^ラる^ル事^{コト}なり^リ

秀頼公の御為に害を除き太閤の恩に報い奉らんと思ひ
し不運尽かくあつし事何を悔むべき是ハ太閤より賜ハ
ア一切及正宗の脇成りありかゝるふおあつすよとて哭へ
けり

馳走の士を付くりてあつし事ども片時も早く死ん
とく食せば馳走の士いで兵部がさうしひよ及ぶべき
よくいさうく最後の御用意ゆへいとひひききき
さうバ此頃腹中のゆきまは糞糞水をききまへと云へば
其設してすめくまは快く食して打伏し軒かま

しり

田中石田を引具して大津よりありきまは

東照宮本多

正純よ石田を守護とまきよし仰せられりと正純石田小向
ひく秀頼公年若く事の是非を志しめさう唯太平を致
と道こそ有べきよし軍もさうかく恥辱も及ま
しぞうと云へば三成吾土民より國を賜ひし恩を
へんやうなう世のまほをさるふ徳川殿を打たさばハ終り
豊臣家のしめようしとせひく秀家景勝を始とて
同心なうしを志ひく勸えそと遂に此軍を起しり
ま戦ひは臨んで二心ある輩裏切せしを勝べた軍は打まけ
ぬるこそ口惜多き二心ある人ごふなうバ汝しちを始めか
くれぬか免ちん又志を失ひしよ運盡ぬまバ九郎
判官も衣川まで空しくなりし吾打まけハ天命

とらふ正純^{チサキ}智将^{チシヤウ}ハ人情^{ニヒシヤウ}を討^{ハカ}て時勢^{ジセイ}を知^シるところをせ諸将^{シヨシヤウ}
の同心^{トウシン}せざるも知^ラどかろくも軍^{イクサ}を起^{オコ}さざるものなる
軍敗^{イクサ}まじく自害^{ジガイ}もせでかめらまじくハいふとらふも三成^{イサウ}念^ニ
く汝^{ナニ}ハ武畧^{ブリヤウ}ハ亦^モ知^ラざりき腹切^{ハラキツ}く人手^{ヒトデ}ふかからしむるハ
葉武者^{ハムシヤ}の事^{コト}よ頼朝^{ヨリトモヨウ}公土肥^{ドヒ}の杉山^{スギヤマ}まじく朽木^{クキキ}の洞^{ホウ}は身をひそ
め心^{ココロ}ハトのも知^ラらざ大庭^{オホバ}まかめらまじく汝^{ナニ}ハ嘲^{アザケ}らるべ
大将^{ダイシヤウ}の道^{ミチ}ハかざるも汝^{ナニ}ガ耳^{ミミ}ハ入^イら今^{イマ}ハ是^{コノ}まじくなること
物^{モノ}もいそげ

東照宮の御前^{ゴゼン}へ三成^{サンセイ}を召^ヒ知^ラせていふ武将^{ブシヤウ}もかざる事
むらむら有^アきめなり恥^ハまあふと仰^{オホ}せらるる三成^{サンセイ}
くも打^ウとけく唯^タ天運^{テンウン}の志^シくも知^ラまてらるる

看^{カミ}をまらむらむらとせし 東照宮三成^{トウシヤウ}ハさだむ大将^{ダイシヤウ}の
器量^{キリヤウ}かろくも平宗盛^{ヘイシユウモウ}ハ大^{オホ}ニ異^イなりと仰^{オホ}せらるるも
いへり又一説^{オホトクニヒト}中納言^{チュウナクワン}秀詮^{ヒデアキ}石田^{イシダ}ガ体^{タイ}をんやとて座^サをたれ
しハ細川^{オソカハ}忠興^{チユキウ}何^{ナニ}でも益^{ユキ}なき事^{コト}ありといふも汝^{ナニ}ハ三成^{サンセイ}
秀詮^{ヒデアキ}をんやとて汝^{ナニ}ガ心^{ココロ}あるを知^ラらるるハ愚^{オホカ}なりとて
いも約^{ヤク}またがひ義^ギをまて人を欺^{アソ}ましく裏切^{ウラキ}くするハ
武将^{ブシヤウ}の恥辱^{チジヨク}未^ス世^セでも語^{カタ}り傳^{ツタ}へて笑^{ワラ}あべいと云^ヒくも
秀詮^{ヒデアキ}祠^{ヒコナ}をりりり又^{マタ}三成^{サンセイ}大津^{オホツ}といふ時^{トキ}御本陣^{ゴホンジン}の門外^{モンガイ}
小壘^{オホウ}をりき其上^{カミ}に坐^マして小^{オホ}諸将^{シヨシヤウ}おるるが福^{フク}徳^{トク}正^{マサ}
則^{スな}無益^{ムヤク}の乱^{ラン}を起^{オコ}して其^{ソノ}有^アゆることいふまじく石田^{イシダ}の
まを生^{イク}とて縛^{バク}らるるハ天運^{テンウン}なりと云^ヒくも正^{マサ}則^{スな}祠^{ヒコナ}

わろくさしきぬ黒田長政通らまは馬より下りて不幸よ
てかきまりぬ是をこそききまは羽折をぬのできせし
まはしりといひ

石田を始免小西安國寺生どもして三人の肌は木綿のやま
しものをききしを東照宮すし召石田ハ日本の政務を取
しる者なり小西も宇土の城主なり安國寺まはしりしむべき
者よのほど軍敗まはしれ置まはた安んずるも大将の盛
衰ハ古今は珍しき命をみどりし棄ざるハ將は必ずす
和漢其まゝめし多し更し恥辱はゆゑ其まは京中をこし
ちりば將しる者よ恥をあはる事吾恥あるべしと仰有て三人
よ小袖を賜ふなり石田よんすればこゝろハあはしむる事

問ふ江戸の上様よりといふハ雜事をとりし徳川殿と
答ふまは三成何徳川殿を尊ぶべきと一言の禮は及びばあ
ま笑ひて居しりり

小西ハ敵對の吾ふこれまでいひし心は恥しりし
涙を流しりし安國寺ハかくいひて赤面し俯き居し
アハるし三成を誅する耐車は載る六条河原まはし
石田顔色平生の如くなりしとや又石田治教が天下を取
しと云くもあはしりしお笑ひしと大軍を率ゐ天下にけ
目の軍しりし天地やあはしりし間ハかくれあはしりし
とも心よまはしりし事あはしりしやさびしともあはしりし
りりりりり

○小幡助六郎信世ハ上野介信繁ガ三男あり上野の人なり十
 五歳あり大坂に赴き諸家の体をもつ石田ハ太閤無二の
 電臣たもまじバ仕へたり後禄二千石をあへたり関ヶ原にて三成
 敗北の時おし隔らまじ三成は従ひてそのを切ぬげく三成が
 新方をもつ江州石山よ来りて郷民かめりて大津に
 あり百姓をバ賞せられて金二十枚を賜りぬさて信世を召
 出さまじ石田が行へをせよ信世兼て三成が士小幡助六
 とや考まじ主の在所よく知れ然も年比恩を借
 する身の今日此難をのがめん為に主の在所をバ不義やい
 きし骨をひびきまじかきやまじたまじ試小幡助
 六切てたり 東照宮の忠義の士なり三成

が行方ありし知れまじあまじあふる落行か
 めらまじこれ士ありの老を拷問及ぶべし持し人ハ忠臣
 義士ハ不便をまじ加め少く縄をまじけと仰有て則赦させ
 ひたり信世近たありの寺は信世の語ありハ
 ざり外に赦を蒙りまじ亦恥あり人も討てまじ屍を
 かきまじ自害しるを大津小幡助六の外に
 せよ

○関ヶ原の乱れ時加藤嘉明の少方大坂にちりバ河村權七
 郎を伊豫の松前より大坂にやまじ忍びく屋敷にあり
 北の方に相見え松前より長臣等がかきりしありハ若奪ひ
 取んとせんしも臣かきりし危くを思ひカヨまじひそ

しとく屋敷の隅に井楼をあげ柵の木をひ敵もむらへるが如くか
なむぬ時ハ自害をすめ臣も御供やなると云々も小細川忠興
の小北方自害の後人質を奪ひ取事止りたり河村は二百石の
禄を増興へらまうふ後河村いひくも大坂川口のちり固く申く
通るべき程あたを尾ヶ崎の漢夫をかこひ船は糸細の中よ
身をひそめ敵の中よ入るちりハ必死を思ひ定めしむるのこ
関ヶ原の軍は首取とて老は同どりけ然るも恩賞の薄なる
明らかなるぬ殿なりとて出奔しされ嘉明念く探出し
誅せざるやと云まうらる山中よかくも居り大坂の乱起
りし時嘉明江戸は残しとめられ不慮の事あはば取またて
攻殺んといひあへり其比夜更く河村嘉明の屋敷の門をたき

青木佐右衛門を呼出れ青木あやしく立物くんは河村なり
こいともいうある事ぞといふ河村事あはしりしやうなまもも
君は仕ふる者の忠を致さハ常の習ひなり然るふるあ大坂
の事小ちり殿を嘲りく物奇しき事後悔今さる益なし
十餘年山中よかくも居りふ志りの事あ殿も危くも
ちりとすく夜を日小継くありとていハ青木誠は義理の
志ハさる事なれども殿のいう甚しきハかくとやうも
やもさる事なく帰らさよといハ河村臣も者の義を知り
なバ河村ハなと来らるやといもさる門内よ入はとく
歸まてハ口をの初よ此上ハ町屋よかくも居く殿の先途を見
んと云らバ青木さる先やてんんとく内よ入嘉明は告まバ

くまよび入よまらばやがて寝所ニシゴに召出され一が目ヒトメ入るより涙ナミ
を流ナガさまらふ河村も涙ナミダをむせび君臣クニシニ志ココロをば一翹ヒトヒラもなかりわが河
村カハタのひもよまらば殿トノの御前ゴゼンは知る事コトよ今生コノイハのこひ出イデゆふんとや
嘉明ヨシアカラ汝ニが志ココロいもんやうもなりと悦ヨロバまきと夜明ヨアケて河村カハタこそ来れ
とく下シモ終ハジメまでいひとや一ヒト大軍オホイクサの援有タマヘがゆくいさみりり嘉明ヨシアカラ
寵愛チヨウアイして八十石あるらまらう程ハタたなく病死ビヤウシしるまらば奥州アウウ
四十萬石よなまらう時河村トキカハタなまらうとく人コクセイの輔佐ホサ
らんよまらばげうれしとくや

○加藤カトウ清正キヨシガの北キタ方も大坂オオサカをなすを石田イシダ人ヒト志ココロまらうとくやと六
をひきまらば清正キヨシガより付ツケらまらう竹田タケタ善兵衛イハニサオホキ家正イハニサオホキ大木オホキ土佐恒持ツネキチ
謀マカを思オモはらう轉法テンハフクチ口クチは居イる清正キヨシガの舟奉フネノホウ仍イタラシ梶原助兵衛カサハラスケ山ヤマ梶子カサハラ

の羹汁カウシユを飲ノミせ四ヨロ夜ヨ移シりてせび疲ツカまらうとく大病人オホヤクナヒのこま
なりしをわらふのせ綿ワタ帽子ボウシかかへせ前後ゼンゴは袋フスミかきし門番モンバンの
前マエまらう戸トをひいた断コトワリく屋敷ヤシキはゆる事コトなまらう及オキび後ノチハ見
なまらうふ小谷コガめが又マタ川カハタチ口クチまらう蜈蚣ムカデ船フナボネを晚バンごまらうとく
へをせまらう是コトも番船バンフナ見ミなまらう後ノチハ早ハヤたおまらう
なまらう守ミかまらうぬかまらう清正キヨシガより吾ワレハ石田イシダは興ソウすべ
まらうなりしうもらうて水ミヅの方カタを敵テキよこまらうとく落オチせよ
かしと云来イシヤクまらば大木オホキ志ココロをば事コトまらうハあり水ミヅの方に
此由コトヨシを告ツケぐ梶原カサハラが袋フスミの下シタは水ミヅの方カタをわかく其上オホノよりわ
まらうとく毎オホモのこまらうかまらう戸トをひいた門番モンバンの首ウチを通トホまらう
土佐トサも後ノチより供トモしる若見ニシミ谷ヤめらうとく水ミヅの方カタを刺殺ナシコロ一切キチ

死シよレんハ〜とシひ〜事コト故コトなクも〜バテ轉ホウ法ホウ口コは〜頓トて
 蜈蚣ムカデ船フネ又マタ乗ノり〜だ〜か〜番バン船フネの前マエを〜つ〜と〜行ユく〜二ニ三サン町チヨウも〜なり
 々〜も〜バ〜あれ〜ハ〜い〜う〜も〜〜と〜さ〜ら〜だ〜ひ〜〜と〜間マは〜鳥トリの〜飛トぶ〜〜と〜
 一イチ里リあ〜まり〜も〜〜と〜だ〜の〜ひ〜ぬ〜番バン船フネも〜〜と〜〜と〜〜と〜碇イカリを
 あ〜げ〜追オ付ツん〜と〜せ〜〜と〜間マは〜行ユく〜遂ツに〜肥ヒ後ゴは〜下ゲア〜〜と〜大オ木キ
 件ケン回ヘハ〜大オ坂カは〜居イ残ゼア〜〜と〜此コノ事コト洩モゆ〜〜と〜打ウ手テ来キら〜バ〜あ〜ら〜ど〜戦セん
 と〜待マ忽カ〜と〜関セ原ノの〜軍イクサや〜あ〜〜と〜〜と〜バ〜思オモハ〜〜と〜難ナシを〜の〜ぐ〜れ
 々〜り〜大オ木キの〜佐サ々〜成ナ政シは〜仕シ〜と〜後ノチ清キヨ正シテは〜仕シ〜と〜才サイ畧リヤク篤トク実ミツ兼カネ備ソナへ
 一イチの〜た〜の〜も〜バ〜清キヨ正シテ電デン愛アイ厚ウ〜と〜〜と〜今イマ度ドの〜事コトの〜り〜て〜又マタ二ニ千
 石イシの〜祿ロクを〜増マあ〜〜と〜〜と〜〜と〜の〜り
 ○前マ田タ利リ長チヤウの〜士シ松マツ平ヘイ久ク兵ヘイ衛エイ若ニホき〜〜と〜兵ヘイ書シヨを〜讀ヨミ一イチ飯イッパンの〜間マも〜懈オロ

○前田利長の士松平久兵衛若き〜兵書を讀一飯の間も懈

ら〜ば〜常ジョウ人ニは〜語カて〜云イ此コノ一イチ人ニは〜射イさ〜〜と〜〜と〜あ〜〜と〜萬マン人ヲを〜一
 刀タチは〜斬キル〜道ミチな〜り〜と〜〜と〜利リ長チヤウ大ダイ聖セイ寺ジの〜城シヤウを〜攻セ落オト〜と〜川カハ返ヘは〜時
 利リ長チヤウの〜士シ大ダイ將シャウ山サン崎キ長チヤウ内ナイ守シュ浅セン井イ野ノり〜せ〜ん〜と〜云イ久ク兵ヘイ衛エイ道ミチ細ホソく
 左サ右ウ深フカ田タな〜も〜バ〜大ダイ軍イクサの〜進シン退タイい〜〜と〜〜と〜半ハ退タイ〜と〜〜と〜時トキ長チヤウ
 重シ兵ヘイを〜出デ〜と〜進シン退タイ〜と〜〜と〜か〜ら〜ひ〜〜と〜〜と〜敵テキハ〜案アン内ナイ者ジャな〜り〜必カナラ
 定テイ味ミ方カタ利リひ〜〜と〜〜と〜山ヤマ崎キも〜入イ〜と〜既スデは〜大ダイ聖セイ寺ジを〜攻セ落オト〜
 大ダイ軍イクサな〜も〜バ〜敵テキハ〜攻セら〜〜と〜〜と〜〜と〜を〜あ〜〜と〜〜と〜い〜〜と〜〜と〜〜と〜射セ取トルべ〜〜と〜〜と〜
 久ク兵ヘイ衛エイ長チヤウ重ジュウハ〜勇ユウ将シャウな〜り〜大ダイ聖セイ寺ジの〜後ノチ話ワタシは〜〜と〜〜と〜口クチを〜〜と〜
 ひ〜〜と〜打ウ切キん〜は〜其コノ鋒ホウ日ニチ比ヒは〜倍バイ〜と〜〜と〜吾ガハ〜急イソ〜と〜敵テキ其コノ虚キヨを〜〜と〜
 危イき〜〜と〜〜と〜又マタ難ナシも〜あ〜〜と〜吾ガ城シヤウを〜馬ウマの〜蹄ヒは〜蹴ケち〜〜と〜〜と〜

敵は箭の一筋も射をせしむるに居る者やいべき明日れ
軍陣をこぞとていふに敵を恐るぬ燈ハあす人々知ら
せんものをもと云り其夜物主皆張番を出入山崎打巡り見
て久き傷が足輕ハ何なる味方迫く置しやといふ久き傷はな
何れに勝敗の理をたゞ敵を侮り勇まわらうと利害よく
たゆれ士を下知する事こそうそそれといハ山崎守て敵を恐
まてとてうそをいふと罵るをいふよりせんらたあ
そひよと留めたり久き傷のよく憤て強敵をあてりて目を
驚うさんおとといひ定めく居りたり

其夜長重ハ士大将を集め江口三郎左衛門を大将として夜に
せんとなりし小僧大南よく風烈しく夜討を止られし

江口風雨ハ夜討又好むありといふ人々皆危し
よとていふ御幸塚の左右沼よく人馬のかけし
うせ明日敵引取る時追結くといはれまに討勝べしと云

長重の士大将江口三郎左衛門正良惣がより見渡せば敵
段々引退く時こそよき事とて兵をおし敵を喰ひ
と鉄炮を打つる長重もやがて兵をすめられ

又一統長重鉄炮の音をゆり後まゝおどもして馬は鎧を
合せしむるを存ししは江口より願く今よ初めぬ此殿
の早き哉と悦びたり長重これ浅井山を取り敵の頭
上より打つるあなば盾をつらする事ありし

ハ江口尤然るべしとてあともうつたはる兵三百人を引
具し浅井山よのほり敵を目の下よ下りて下りて鉄炮を打
りけりて坂井与右衛門直吉も弛来る長重いよ競ひか
りて一足も前よすめ一寸も退くべしとて下知せられ
て金沢の軍をゆるぎたる終夜の雨よかりの陣屋もあ
れば物具皆濡とほり鉄炮は銃口よ水入り火繩もふり
げりて左右ハ泥あり多くハたのむて松のむれをなが
れ入る足ぎとゆるとせりとてりり
金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣をめぐりをとて江口麻毛を取
かきと下知すまば松村孫三郎馬を乗出り敵の陣れ中を
急切り荒田五兵衛つらつらくるを入る

松村ハ五ヶ所痛手負ひ馬より落くるを小池新堀松村を
馬よのせ引取せしとあり
長父子ふと止りてを専途と戦ひけるは若多し長
好連とて十八歳多れ老いも付せ敵の中よかけ入る討死
せんともを横田久右衛門馬の口よを付引返して長重の軍勝
よ争ふあはれと追詰り太田但馬ハ殿の陣よ軍ありと兵
をよりて弛来る水越縫殿山城橋よのりて鎗を提敵小向
松平久兵衛ハ太田が陣より足輕を下知して居りて銀を
飾りて曹をよ思ひ物具よ馬を強よせたり馬を乗るあり
水越が前よつと進むく小松の士拜郷治大夫と鎗を合せりて
水越もつらつ安孫子作大夫と鎗を合せて

一説松平ハ不破全キ傳と鎗を合はともつり

爰コトあサウくテ双方サウもテ負オ付ヒきテ者多カ互タニセ精イ力リ尽ツきキ相ア引ヒよヒひキ

退ヒりキのノ別ワきセしタりノ後チニト利ト長シ二ニ人ガのノ前ゼ後ゴを向まシりテ不

久クきシ傷ケりタるハ縫ヌ殿ノハ初めヨりテ止トりバ一イ番ハ誰レも争ふベキナ

とキもシ縫ヌ殿ノハ久兵ヘ衛ノ敵ニ鎗ヲ合セしテ事トもクバ一番

よクもシ利ト長シ武ブ功コウハ及ぶ者あラんカく志万マン人ノ

あモもシ一ニ番ヲ松マ平ノに定めレ共ニ感カ状ジヤウあラんカ

ぬレ松マ平ノ此ノ時キ禄ロク五ノ百ノ石ヲ後チ三ノ万ノ石ヲ賜タりテ伯ハク耆シとシひタり

一説松平マツダラを松系マツキと作ツクる何ニも是ニあラる事トもシ一説ニ此

日ニ金ニ沢ノのノ士シ七ノ人ノ鎗ヲ合セせル中ノあリもシ岩イ田ノ傳ノ左ノ馬ノ小コ松ノ方ノ

のノ手ノ負ヒしテ首ヲとリてシもシ松マ平ノ久シき場岩イ田ノ今ノ日

とシもシ鎗ヲ合セ其ノ上ニはヒろクひ首何ノもシせんトいハひり

うレ巴イ岩ノ田ノ尤モなリとシて同めル引ヒ取リしタり後小コ岩ノ田ノが首

を取リて大音オあゲ岩イ田ノ傳ノ左ノ馬ノ鎗ヲ合セ又モ首ヲ取リ

引ヒ取リ口ノ後ニは一芝シ居ルもシ三ノ度ノ功コウ名ノあラんカもシ不

松マ平ノが首あラんカ下ノ知ラずニ引ヒ取リしタり後又モ悔クらル

とシもシ岩イ田ノ後ニは内藏ノとシ稱ス又モ利ト長シ浅シ井ノもシ鎗ヲ合セ

せし士ノ感カ状ジヤウあラんカ由ヨ小コ松ノもシ一ニ番ヲ小コ松ノのノ士ノ

殿ノとシ御オ感カ状ジヤウ下ノりもんヤとシ云ヒくも長ナ重シ浅シ井ノ略ハ

道ミチ細ホく左右ノ泥ドロもシかケ引ヒ自ジ由ユウあラんカ勝シ敗ヘ定サらレるも

さシハシもシ退ヒく敵を追詰メ橋ハシのノあラんカ

もシ合ヒをシめテ橋ハシのノあラんカもシ一ニ番ヲあラんカせしもシ巴

引取敵より少くも追返されしは似し武勇
の働ハさる事なれども感状ハあつたまよ及りばといふれ

○利長乃兵山田勘六郎八十四才も父の仇を討てる人ありあ
日利長孛藏の戸を屏くとして山田は鑰をあづけらまじゆ
急に來てて呼ばしよおそりりなきに急ぐ杖を以て突き
ふらふらふ額の中ア血流る跪く平伏せし脇差の
鞘を以てバシバシひもすやとてきらみうげく杖を以て
打んとせしれをかんより山田を引のけり山田此より病と
稱して引り居りしは関ヶ原の乱起りし利長大聖寺の
城を攻る時一段高た所を打つ武者のを見物せし山田五六

十人計引具しを寂期と知りしは通り城は先
かげして一番は棄て鎗より乳の下を突くとわされ痛もなれ
堞の下はあつたかめく從者よいふあめりうバ息絶する内は
利長の前より昇來る利長は後悔せし事甚しく其あや
まらざるを懇に涙を流さる山田やがて死入り行年
廿歳世よすくも美男なりしが大剛のたつたて討
死し其前日より朋友は奇南香を以て贈るを
其頃大聖寺にやらるひくめてしりといひり
○黒田孝隆入道如水関ヶ原亂の時九州を打平げらまじゆ
一馬ハ二寸針の思き馬あるが百會は手負といふ旋毛有り如水
此馬を指してとまじ此凶相をたつたあつたれども人

萬物の靈なりと仰ぐ人よ勝へき萬物なり吾不道あり
凶相是より大なるはなり此馬の毛きほよかひと云ふ
○関ヶ原乱の時大友義統木付此城を攻る如く後卷せら
まうくば大友立石より退き石垣原より先陣をおき此に墨田の
士大將久野治右衛門尉とて曾我部五左衛門を添られり
敵四五千討立石の民家を後よあて待りけるを久野遙平とて
金の天衝のさし物けり栗毛ある馬よ象かかれと下知りける
を曾我部今志とて待りけるを久野遙平とて勝利ありたり立て馬よ
息つがせ一同よりくはらせ後よ味方のはぐりし時衝かたり
一戦はじりしとて久野が後者荒巻軍兵とありあ者
豊前前の地士なりしが若た村宮松とのひく十五歳より功名

せし剛の者五右衛門が何尤なり馬よあて倒し蹴ちりしとてハ
敵よよるべしとの敵ハ國替の時よくありし者よ皆お
なり近年落ぶるも此乱を死せし時節よく定め鎧を
膝の上よおたきまじりあはるる一騎二騎をくくつけ合
せんといふで勝ぶまや鎧をつれ折やどの軍なりでハ叶ふへ
らばとて馬より飛下り久野が馬の口よえ付こり象あが
陣りのをやりやうよとて後陣より先をこさればこそ取な
免後よおし結んぬるおてつき崩さべしと云く小平田彦右
衛門といふもの馬よ象なぐりやう後陣をまうんとせハ井
上野村すしき男あれば必先を争ふべし大友が若くも木付
よく疲まこ又爰よ来りしすめくといひりしは荒巻怒

て平田汝と共よき其の者あるが度々よあるハ知らるよ今
井の邊に軍は汝を追うけく具足タノクの押付オシツケ切キらる疵キズハ有べ死
よ其後四兵衛治右衛門が父汝を喰ヨビイタひとして向ムカまうし時汝がけあげさ
ふ敵トクのめざすたといひつるあは禄ロクを得エしうばつが蔭カゲと悦ヨロび
しハ忘ワスレまじらうといひすて馬ウマよ先イリキかけすれば二十騎計ガガ
しづいしづいをおろしめりかたりと敵ミテ三手ミテよ分ワカまてるを二陣
を突崩ツキツクと久野ヒサノをやりし者なまは少スコもせよめりハば一文字イチモンジハ
乗込イリコミ戦シひまじも大友オホトモが兵ヒども度々タビタビの事コトよなま今度コノトキの乱ミダ
まじ故主コノチの招オホきよ従スひつを限カり芝居シバキよひつと折オリしき待マ
かけきられバ久野ヒサノ主ヌシ従ス五騎イツゴ一所イツショもく討ウチまじらり曾我部ソノガハ久野ヒサノが
討ウチまじらるあは横ヨコあひよめけ入イり討死ウチシして平田ヒラタハ久野ヒサノが討ウチまじらる

て馬を引返して引退きぬ荒アサ荒アサハ敵キ籠カひ掛カるをえり引
んとく人数ニジンズを集ツむ敵キ嚴ギしく進スむと見て首クビをハ皆捨ナせ
馬ウマの輪ワを巻カく引ヒき後殿シノガして引退きたるが久野ヒサノが討死ウチシを
知ラざりし其日の功名コウキキウいづれに成ナり黒田クロタの二陣ニジンの士大
將シヤウ井上イノウエ九郎クワウ右衛門ウヰモ元房モトノボ防ボウと云イハ野村ノムラ市右衛門シウヰモ後車ノチクルマ人ヒト遙ハシと跡アトよて関セキの
を穿キ此山コノヤマよ上ウり敵キの軍イクサ立タてを見ミ指サくべしと井上イノウエの兵
よ下知シタし進スむ後ノチ野村ノムラ先サキ軍イクサ有アルハ分明フンメイなり何見ナニミこと事コトの
るべきといふと井上イノウエが陣ジンおろしめり通トぎされバ今イマ少ス先サキは
押オシ出デされよ廣ヒロき所トコロも陣ジンせんといふとも聞キ入イられバ獨ヒト言コトして
怒イカりたるあは井上イノウエ主ヌシ従ス三騎サンキ小山コノヤマよ奪ウバひけし物モノをぬい
味方ミカタをまもるを陣ジンをすめり

井上唐冠の曹鳥毛は棒のけしおとつり又佩楯を
取捨くば井上が手れ者まらやとげし軍よといは
めしつたり

井上野村敵ハ皆かちどちなり馬のかけ場をたのむも必死
の敵よわろく〜〜〜か〜〜〜皆馬よりわり立勝よ
争あ〜敵あ〜殊よ譜代重恩の士どももつを限と必ひ定め
〜〜〜敵か〜〜〜相が〜〜〜待軍して突
崩〜〜〜足を乱〜〜〜追〜〜〜下知〜〜〜と
ち〜〜〜大友が兵是を〜〜〜まば〜〜〜かけせば忽突敵さん
とどひ〜〜〜ひ〜〜〜野村ハ朝鮮よ〜〜〜漢南の軍よ功也
勝よも負行歩心よ任せざれば片ものよ〜〜〜馬よ

争あ〜とつりて下知〜あり石垣系ハ原の中よ高サ一丈餘乃
石垣土手六七町討もつ〜〜〜井上野村あ北石垣をこま
〜〜〜軍よ勝〜〜〜進〜〜〜敵も回〜〜〜進んで石垣を
踰んと〜〜〜をつき〜〜〜北るを追〜〜〜井上鎗を接
へ押し〜野村ハ馬を乗〜兵を整〜〜大友の士大将吉
弘加兵衛宗像掃部是を見〜〜〜味方まけ軍あ〜び
敵勝よ争あ〜足を乱〜〜〜追立んと〜〜〜力なりと
ても討死せんと必ひ定め〜〜〜か〜〜〜二千討〜〜〜
とあゆみよる井上野村是を見〜〜〜折〜〜〜
相が〜〜〜待〜〜〜間近〜〜〜詰〜〜〜散〜〜〜突合切合
〜大友勢一町行引退〜〜〜追も〜〜〜の芝

居小跪く心静し息を休ぐ大友勢又押急りく爰をせん
どく火を焚いて戦ひたり吉弘ハ尖眉刀を打ありく爰を最
後とあまひらるるを井上見ていざあうあつんと刃をかくれば
吉弘打笑ひ渡し合せしが草摺のまづまを十文字の鎧ふつ
くせく深きなれば少くもあつりくもを小栗治右衛門が従者
弓を持ししが真中を射つてぬく吉弘心猛しといへども終に
叶はぬ首をば小栗取てり

又一説よ吉弘ハ黒草よめてむぐし甲をさへ熊毛あく
志と後を飾しる曹少く三尺計の刀を以て井上と馬上小
て渡し合馬より突落されしが脇指を抜て手裏剣り
あつ井上が弓手の股の中其間よ小栗引組で吉弘が首

を取しつり又一説よ吉弘と井上ハ吉弘一年中津よ有て
きくし深きくは此日井上小向く弥や一鎗をあへん
といつて突合し吉弘が胸板を二鎗まぐ突くも十文字の接
かき裏かき井上吉弘が内曹を突くも十文字の接
手あく忍の緒を切曹傾きて目をあきだれば少くもさ
すくもを吉弘が左の脇より下着の青くゆるを目か
て脇腹をつきしりく吉弘遂に討まりしもいり又此
軍場の後よ吉弘が厲鬼あきしりくゆきしりの人よ崇をな
くもを吉弘がゆりの人石垣原のかへ別府とつあふよ吉
弘が屍を葬てり別府清田濱田の百姓あつりたるあめバ
采を供する忽ちりあつり吉弘が嫡子ハ清田よ仕へ二男

ハ細川忠奥^{オカハ}は仕へーが父のあま^{アト}を忍ん^ニとて別府^{ベツフ}よりて
其印^{シヨシ}の石を拜^イせーが多く采^サを供^{ソウ}るよりく鳥^{トリ}の集^{アツ}ま^ク
糞^{フン}ふく^クま^シう^ハ今^{イマ}より武具^{ブク}をそ^ソま^シう^ハ治^チり^マ
さ^サな^クく^ハ治^チり^マは^ハざ^レと^ハい^ハい^ハが^コ是^コより采^サを供^{ソウ}ふ^ク
し^ナり^ハ木刀^{カトウ}を作^{ツク}て供^{ソウ}ふ^クバ^チあり^トい^ハり

宗像^{ムナカミ}も井上^{イノエ}が從者^{ジュウシャ}大野^{オホノ}勘右^{カンサウ}と引組^{ヒキグミ}し^テも^モ勘右^{カンサウ}が第^{ダイ}
休^{キウ}也^ヤと云^イへ^テ法師^{ホウシ}武者^{ムシャ}走^{ハシ}り^マ掃部^{サウボウ}が脇腹^{ワキハラ}に刀^{タチ}を突^{ツク}立^タえ^ハい^ハ
や^トと^ウり^ハり^ハれ^バ遂^{ツビ}に^モそ^コろ^ニあ^リて^ハ討^{ウチ}ま^スり^ハ大友^{オホトモ}の勢^{セウ}突^{ツク}崩^{クツ}
さ^シて^ハハ^シり^ハ又^マた^ハか^リり^ハ戦^セひ^マす^レも^モ井上^{イノエ}野村^{ノムラ}追^{オウ}ひ^マ
ぢ^りの芝居^{シバ}に^ハ跪^{ヒザマ}き^ハ又^マた^ハは^ハ立^タあ^がり^ハ突^{ツク}の^ケ幾^イ度^{タクヒ}と^ハい^ハ
事^{コト}を^モり^ハ大友^{オホトモ}が勢^{セウ}終^{ツク}ふ^ハ折^セ負^マく^ハ残^{ノコ}り^ハて^ハ討^{ウチ}ま^スり^ハバ^ハ僅^{ワザ}計^{ケイ}

小^コな^リり^ハ立^タ石^{イシ}に^ハ引^ヒき^テ義^{ヨシ}統^{ムネ}力^{チカラ}を^シ如^ニ水^{ミヅ}に^ハ降^カり^マせ^レれ^タと
○義^{ヨシ}統^{ムネ}木^キ付^{ツキ}の^ハ城^{シロ}に^ハ向^ムふ^ハ時^{トキ}細^ホ川^{カハ}忠^{チウ}奥^{オク}の^ハ士^シ大^{ダイ}将^{シャウ}松^{マツ}井^イ有^ユ吉^{キチ}加^カ藤^{トウ}清^{セイ}正^{テイ}
に^ハ加^カ勢^{セイ}を^シ乞^{コヒ}う^ハり^ハれ^バ三^{サン}宅^{タク}喜^キ藏^{ゾウ}を^シや^マす^レり^ハ三^{サン}宅^{タク}殿^{テン}の^ハ先^{セン}陣^{ジン}
あ^リて^ハ功^{コウ}名^{メイ}を^シせん^トい^ハひ^ハり^ハ他^タ國^{コク}に^ハ往^{ユキ}く^ハ城^{シロ}に^ハあ^リて^ハい^ハん^ハり^ハ
ハ^ハ存^{ゾン}も^モあ^リて^ハ事^{コト}な^リと^ハい^ハひ^ハり^ハ清^{セイ}正^{テイ}が^ハ武^ブ功^{コウ}あ^リて^ハ他^タ國^{コク}に^ハつ^ク
り^ハり^ハも^モ吾^ワ名^ナを^シ汚^{ケガ}さ^スと^ハい^ハひ^ハり^ハあ^リて^ハい^ハん^ハり^ハ名^ナを^シ食^クふ^{コト}
そ^ノ心^{ココロ}得^{トク}ぬ^ハ永^{エイ}く^ハ我^ワ家^カを^シ去^{サツ}く^ハ心^{ココロ}ま^シう^ハせ^マす^レと^ハい^ハひ^ハり^ハば
三^{サン}宅^{タク}を^シあ^リて^ハ庄^{シヤウ}林^{リン}隼^{スイ}人^{ジン}に^ハか^レて^ハ告^{ツケ}殿^{テン}の^ハ外^{ソト}口^{クチ}を^シ蒙^{カウ}り^ハて^ハれ^ド
殿^{テン}に^ハて^ハ奉^{ホウ}公^{コウ}せ^んと^ハ存^{ゾン}る^ハ大^{ダイ}将^{シャウ}も^モい^ハひ^ハり^ハあ^リて^ハ隠^{カク}れ^テあ^リて^ハ給^{タマ}
い^ハん^ハや^トい^ハひ^ハり^ハ隼^{スイ}人^{ジン}心^{ココロ}得^{トク}し^リと^ハ許^{ニル}し^テ清^{セイ}正^{テイ}守^{ウシ}土^ドの^ハ城^{シロ}を^シ
攻^{セム}む^ハ三^{サン}宅^{タク}に^ハあ^リて^ハ三^{サン}本^{ホン}を^シあ^リて^ハの^ハ差^{サシ}物^{モノ}を^シ一^{イツ}夜^ヤ半^{ハン}より^ハ塩^{シホ}田^タ口^{クチ}の

堤より引く明るをまの川宇土よは南條元琢こり居り此元
琢ハ伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次郎二男少く兄の元重よ
劣らぬ大剛の者あるが毛利元就と軍さる事度そよ及らふ
敵あるとぞて只一騎馬上より上帯志めてかけわし半里
後軍兵ども追つゆく速は國境は池の押寄る軍兵を追散
し勇士なるが秀吉の勘氣あく小西行長が許まかされて
朝鮮あても武勇此振廻せしなり此度清正あるとぞ只一騎
城を乗出元琢が從者福西九郎大夫是も十八の時より輕解の
軍よあひゆく物師あるが元琢はわくまどと城をわく池の
山の上小清心の馬藪の馬印ひくめたたくとえりまは跡進んで
三宅より合元琢馬より下りて三宅と鎗を合せしとを福

西透向なくまきより三宅を斬る三宅がつきし鎗を元琢握
りてはひよ引奪ひく既危りし三宅の從者元琢が曹
の真向を一刀斬付し元琢目眩きてくわくおろちあぐり刀を
抜て三宅が從者を切倒し清正苗の二本とあるハ三宅喜藏
あしん討まを老ともと下知せしと刻の下より飯岡角を擡
莊林隼人馬ふりしを合せかけ来りしれバ元琢敵つた
なばあしりちんと三宅をすて引返して清正三宅を討ち其
日被らまし羽織は千石の禄を添くあしりしなり
又三宅元琢が曹をつき落せしは頼よりあはしりし浅手
るまは三宅が鎗よ取付しれども三宅鎗をすて組合しり

しりしなり

其後関ヶ原の軍破まり行長生捕まりたりは清正使を城に
立城を明けと云まは城代小西隼人自害して城中の者
とも助けぬらんやと申し清正許諾して八代の城代小西若狭
も自害し宇土八代を清正に授く清正南條より六千石の禄
典へらまはり三宅と南條と物どころすに元孫汝を討留
せしめ残多しとたふし三宅我もさ存るこつひ
るぞ我

三宅宇土より組する時忽刺殺せべきは其日指する小脇指
少し長かりしと云へり

○清正宇土を圍む時ある夜敵夜討せしむるなりしと下
知せしむるなりしと云へり

夜討せしむる日下坂平分坂川忠を塙鎗を合せたは攻戦ふ杉本守
固きをえんく城中小引返は田中兵助ハ酒は酔くおみりか
鉄炮の音は起る手起あがり鎗を取てかけ知しに敵討取門
内に入り杉本一人大手の柵の木戸口は残り止りし田中内を
かけしむる杉本十文字の鎗あり田中を一鎗つたは柵の中
小入りし清正火を燈し軍せし老をえしむるふ田中今
夜先がけしし清正能見し一番ハ日下坂坂川二人の内へ
二人とも箭創を弓ハ鎗を合しし射し一回はかまは射し
まことのたより田中が創ハ右の腕より鎗創ありバ丸の多し有
るぞし横は疵のあるハ汝が自ら切しむるやと云まは
田中敵ハ銀のたむるの立物打しし曹をえし十文字の鎗あり

杉本^{サキモト}次郎^{ジロウ}分と名乗^{ナリ}て偽^{イツヅメ}と名召^{ナヨボ}りん^ニハ不幸^{フカク}の至^ト
みんとて退^{ヒキ}きりて後城^{キョウシロ}明^{アケ}く^ニ杉本^{サキモト}も清西^{キヨサイ}は奉公^{ホウコウ}に^シバ
此夜^{コノヨ}討^{ウチ}の事^{コト}を問^トま^シつ^ニ杉本^{サキモト}城^{シロ}に入^イん^トとせ^シ時^{トキ}とら^ニないの曹^{ソウ}
を急^キ鎗^{ユビ}を提^チて走^{ハシ}り来^キり^ニ武者^{ムシヤ}を一^{ヒト}鎗^{ユビ}つ^ツり^ニと^シ清
正^{セイ}田^{テン}中^{チュウ}が河^カ澄^{セイ}堀^コは符合^{フカフ}に^シり^ニま^シる^ニバ五百石^{イッパク}の禄^{ロク}を^シあ^へる^ニ田中
其^{ソノ}夜^ヨ一通^{イツツウ}の書^{シヨ}を^シあ^へり^ニ虚名^{キヨマイ}を^シあ^へり^ニ世^ヨの譏^{ソウ}はあ^へり^ニ加^カ禄^{ロク}は
本^{モト}の禄^{ロク}を^シ添^ソへ^ニて^シ肥^ヒ後^ゴを^シ立^タ退^チり^ニ田中^{テンチュウ}ハ其^{ソノ}初^{ハジメ}盗^{トウ}賊^{ソク}ハ
て有^アり^ニ石川^{イシカハ}五^イ右^ウ衛^ヱとい^イへ^ル強^{カウ}盗^{トウ}の長^{ナガ}を^シ秀^{ヒデ}吉^{キチ}の時^{トキ}京^{キョウ}の三^{サン}
條^{テウ}河^カ原^{ハラ}まで刑^{ケイ}罪^{ザイ}せ^して^シ道^{ミチ}く見^ミ物^{モノ}の男^{オトコ}女^{メナ}群^{グン}を^シあ^へり^ニ田中
其^{ソノ}中^{ナカ}は紛^{マギ}ま^じり^ニ石川^{イシカハ}を^シ引^ヒく^ニる^ニ時^{トキ}はつ^ツと飛^ヒ鳥^{トリ}り^ニ石川^{イシカハ}が繩^{ヒモ}
取^{トリ}を^シ唯^{タビ}一^{イツ}刀^{タウ}は斬^{キリ}倒^{タラ}し^ニ五^イ右^ウ衛^ヱ反^{ハン}日^ヒ比^ヒの恩^{オン}は報^{ハツ}い^ニんと呼^{ヨバ}り^ニは

こたひひめく間^マ人^{ヒト}の中^{ナカ}はま^じり^ニ入^イ終^{ハシ}て逃^{ニゲ}出^デる^ニ男^{オトコ}なり此^{コノ}

時^{トキ}二十六^ニ歳^{サイ}と^シや

○関ヶ原^{セキガハラ}の軍^{イクサ}は功^{イクサ}有^{アリ}り^ニ諸將^{シヨウシャウ}の家臣^{カシジン}を^シ召^シく^ニ東照^{トウショウ}宮^{ミヤ}御^{ミコ}盃^{サイ}を^シ
下^シされ^ル時^{トキ}福^{フク}嶋^{シマ}正^{セイ}則^ノの士^シ大^{ダイ}將^{シャウ}福^{フク}嶋^{シマ}丹^{タン}波^ハハ跋^{ハク}尾^ビ関^{セキ}石^{イシ}見^ミハ晴^{ハル}あり^ニ
長^{チカガ}尾^ビ牟^ム人^{ヒト}ハ聾^{ソウ}なり^ニ近^{チカ}習^{ジユ}の人^{ヒト}を^シ能^{ヨク}も^シか^へる^ニ集^{アツ}り^ニ
と^シき^ニや^りた^ニる^ニを^シ聞^キく^ニ召^シ汝^ニ等^ニ年^{トシ}若^{ワカ}く^ニも能^{ヨク}や^りけ^ニ女^{メナ}ハ容^{ヨウ}儀^ギを^シ
さ^しら^りよ^しよ^し形^{カタチ}ハい^いふ^ニも^シせ^しよ^しか^へる^ニ軍^{イクサ}は功^{イクサ}名^ナと^シる^ニを^シ男^{オトコ}
と^シハ^シる^ニぞ^しか^へ彼^{カニ}三^{サン}人^{ヒト}ハ世^ヨは勝^{カチ}ま^じり^ニ大^{ダイ}剛^{コウ}の老^{オウ}なり^ニ汝^ニ等^ニ
志^シ士^シハ二^ニ三^{サン}を^シ彼^{カニ}老^{オウ}に^シ似^ニせ^して^シ人^{ヒト}ハよ^しう^しり^ニなん^ニと^シぞ^し仰^{オホ}ら^せる^ニ
○関ヶ原^{セキガハラ}の後^{ノチ}東照^{トウショウ}宮^{ミヤ}石^{イシ}田^{デン}が乱^{ラン}ハ雨^{アメ}ふ^りり^ニ地^チう^らま^りる^ニ事^{コト}は
回^マり^ニ此^{コノ}より静^{シヅカ}謐^{ヒラ}あ^らんと仰^{オホ}有^{アリ}り^ニ小^コ謀^{ボウ}大名^{ダイメイ}皆^{みな}祝^{イハ}し^ニなり^ニと^シ也^{ナリ}

小加藤清正仰のめく悪逆の輩誅せられ恭平と人事必
然ゼンよん徳もども天下に治乱ハ天に陰晴よとてんひらん
ハ晴渡ハシアハシ晴天セイテンとらんも俄ニカに雲の出来て雨アメをどがめま
事もそののまんへバ測ハカぐたハ人れ心よてんと申されまば
浅アサくは御感ミカりハシととなり

但清正の此論コノロンづまの所よて此事なりや詳ツツあり

○関ヶ原の時黒田如水ハ豊前中津より九千餘の兵を率
ゐ九月九日打出く諸所の城ども攻落し筑前筑後の浪人た
相集り大軍よ加し附嫡子長政に使来り関ヶ原よ石田を
とめ敗北し金吾中納言秀詮ハ長政の謀よよりく裏切
せしむし史告シコクらむしは如水大に怒りつけ果ハテされ

甲斐守の天下を今日の軍ハとて月日をとり浪人れ
すたをひをあらむもの何事の忠義とてぞ日本一の
つけハ甲斐守なりとぞはやうも其後長政は筑前を賜
りりりまバ如水も京よ上らまると諸國の大名如水の門よ
来りく市をあらむと山名禪高如水と年比の友なりが
如水の奔ヘトよ来りく諸將の尊崇大方ありは殊コトに夜中よ密
談もゆとて世の疑ウタガひもいなり就中三河守卿秀兼親の如く
敬ウヤむとんかしく徳川殿怪アヤしくもカラスなり徳川殿遠トホき
慮オモある人なるまばとてふ心安く立入人の中あもつる目
附ツケを設けらむとて筑前守の武畧徳川殿の賞恩浅く
むらよ斯カクてハ筑前守の為よ悪くならん徳川殿志シすふ用心

あらも皆如水を忍まてこの事なりと人もやん程又醍醐山科
 宇治は浪人あまゝ居るも如水の隠しをさぐるも人々驚かす
 ありいふふとやされども如水もあへば内府を攻亡し天
 下を取んと思ひんはハいと易き事なり筑紫を六皆打平け
 たり嶋津のそ残りありありあつらひをさぐる味方とせん若楯
 つら攻敗らん事尤易き事なり中國備前播磨まで皆空ふ
 りて有りつら我其項二万餘の軍兵をひきよめ加藤鍋島ハ既
 我は随従ひまは兩先陣とて海陸二手より入ち道すがら
 浪人どもをかり集んは十萬ハあへば一清正ハ猛將なり吾旗
 本より有く攻のむ程ありは内府を討滅んるの掌の中より有と
 覚るもことどもは年老ぬ切從へ一國を捨て京小上りし
 臆病者どものきけむくいろくの事小恐まてくろし事を
 誠と心得らまはるやとて扇をぬくも疊を打く大言せし
 まはるは禪高やかくの朝なるとて歸らまはる

全四帙目 全五冊
 近刻出来申上

備前 湯淺新兵衛元復 編輯

同藩 平野太郎左衛門敬邁 校訂

赤木益吉周憲

弘化四年丁未七月

發行書林

京都 勝村治右衛門
大坂 秋田屋太右衛門
江戸 須原屋茂兵衛

常山紀談卷之十六目次

一 浮田秀家八丈鳩へ配流の事

一 小早川隆景遺訓の事

一 佐竹義宣國替此事并車野丹波の事

一 杉原常陸智勇の事

一 前田慶次が事

一 出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

一 伊達上杉陸奥國松川合戦の事 附 永井善左衛門岡野九内

が事

一 石田が子比僧助命の事

一 越後國一揆堀直寄武功の事 附 千利休が事

一 世間太兵衛 伏兵を知る事

常山紀談卷之十六

備前國 湯淺新兵衛元復輯録

○備前中納言浮田秀家ハ関ヶ原の時一萬八千を帥らましが軍
敗ましく近江の伊吹山小かり落らましが美濃の白檜村小志郎
かきまらそ有し小遂小忍びく西國小落下に薩州よる者まらそ小
其事聞えく 東照宮死罪一等を宥めさせし八丈嶋
ぞ流されたるまらそや小若く菴竹あたる戸は雨もたまるに
風もぬせがバ黒木此柱を削りて書付らる

のや焼うきあらし八浦風のとあそりあやどやとてへん
其後芳烈公光政朝臣備前比兒嶋一説西大寺村又わらまらる比兒嶋高船風
これ八丈嶋よるりまら秀家九十餘までながく居

らうが故郷の者としていとなうげは所々の物語して
秀家備前ハ推有と向ふ新太郎少将と答へてお堆が
事なるんとて家老の姓名を呼んで後してハ池田の家にて
有るよ又所々城多きや城のよ伊勢の宮を設け
置しうがいなうと問ふ伊勢此家ハハも士の家
ひと相並びつたてんと答へてハ世ハ治アなり
亂世なるハ八國境の城又士を分ちて岡山ハ士の家多
うるまじき今の有様ゆく治される趣を知しうといえ
しとてや

○安藝中納言毛利輝元ハ関ヶ原の時秀家とて徳川家ハ弓
箭を取しうらども関ヶ原又自ら赴き其の安藝倫後才
の國を削らま長門周防兩州を賜りたり是より前小早川
隆景遺訓して輝元を諫めし中ハ毛利家五十餘郡を
領し富貴誠は溢ししうといふ此より後苟おも國を
貪る心あはば忽滅ぶべきよしといふめらましは輝元隆景の
戒を忘ま果しし國を削らましし隆景先見の明あり
家もしうハざりたり隆景ハ武勇のふは智謀おす
ましり父元就病重くなりし其子を集め兄弟の教むど
箭を取寄せ多くの矢を一ツあし折しんハ細き物も折

一筋づつとちりちり折るゝハキヤとて折るゝ兄弟
心を回くゝと相親むと遺言せしむる小隆景其時争ハ
欲より起る欲をやめく義をもちば兄弟の不和はまじと
いふまじらば元就悦びく隆景の叛は従ふとていふれとを
秀吉九州を討平けらるゝ後筑前五十万石を小早川にあま
らまゝ小隆景これハ吾ふるゝ事なり此頃やと敵なり
身ハ大國をあゝらるゝハ吾を愛する非む九州をあらん
為のかりに謀れとて思ひく秀詮は國を譲り備後の三原お引
こめしむるゝとあり

○佐竹右京大夫義宣の士大将車野丹波ハ剛の者あて白練に
火の車を書き指物とて関ヶ原の乱は義宣上杉は心を合せ

まじらば

義宣四万の軍をひきよめ水戸の城を出多珂郡に到るこれ
上杉の加勢れ為なり然も父常陸公義重ハゆや徳川
家ハ心有らば志ひく誨めらるゝ義宣も兵を水戸に
返されしとぞ

伏見ゆく義宣の八十万石を六十万石削らるゝ出羽の秋田二十万石
賜アたり若いあむなるバ其後討亡せむとて体あまは義宣北國
を誣く秋田はわのしきり水戸の城を奪ひされとて本多正
信を向ひくる時車野組は付し士六人と俱ハ物具し新羅三郎
より傳へくる城を人ハ授んるゝとて口惜きと我ともをん人々
ハ城を枕は死ねやと叫り城中はかけ入るゝを大手あて本多

等大軍ラタイカンあてわつみ生捕イケドリく磔ハシラひかけ火ヒの車クルマ此指物サシモノをくり
添ソヘくをも 東照宮トウショウミヤの召武家シムケの道ミチを知チる者を空カラしく殺コロ
しつるよと敷ナカくせめひわり

駿府スズマより 東照宮御物諾トウショウミヤノモノダクの序ツいでは篤実トクジツある人ハ世ヨは希レ
これ年トシ老オイぬまじても多くハ足タば佐竹義宣サタケノヨシノブ其人コノヒトなりと仰ホ
らましつるを永井右近ナガキノササキ大夫直勝ナホカフ兼カていふあるあよやと申マを
関セキ一召石田治部イシタノヂブと七人の大名ナマノシマと大坂オオサカより争論サウロンの時義宣ヨシノブ
と三成サウジとのやうりあつてみ有アる三成サウジを打具ウチグし伏見フシミ未
だ平ヘ後ノチ三成サウジ佐和山サワヤマは歸カる時七人此面コノオモテを道ミチを討取ウチトルべしと
つらつらと申マふ三河守ミカワノミを添ソヘくつらふ義宣ヨシノブ三成サウジを討ウチせつら
生ナぐひなるとして道ミチ々々よりの歩フミを知チし其身コノミハ物具モノグして告ツケ

来キるを待マて打出ウチデんと用意ヨウイ有アるは是コレは篤実トクジツよあはれや
関セキ原ハラ此乱コノランの時トキも大坂オオサカより頼タノむるゆゑ吾ワレハ其コノよを告ツケ
て何方イッカタにも組クミをぞりき逆乱ギャクランは興クミへするはあはれども
捨スツ垂チ難ナく先祖センゾより已コノカタ来キの國クニを削クサりて篤実トクジツのよ
き事コトつらふ及およびばとつらふも國クニの存亡ソンバウよかゝるべき事コトは
又一ヒト思慮シリヨ有アるべき事コトもやとぞ仰ホらまはるる

○上ウ杉家スギノケの士大將シテウシヤ杉原常陸スギハラノヒタチハ智勇チユウ備ツクりし人ヒトあり 東照宮トウショウミヤ
宇都ウツ此小山コノヤマより引返ヒキカエさせし上杉家ウツノケの軍兵クニノヘども大坂オオサカの
あつりし杉原獨眉スギハラヒトリメをひそめて大敵オオテは恐オソましく引返ヒキカエしつら
とむりしハ其人コノヒトを知チる者モノなり 徳川殿諸將トクヅカノシヨウシャウをひきお先上マシカミ
方カタは攻上セムカり石田イシタを討ウチまんよ十二ジュニ八ハチ九ク石田イシタ敗ハクれし其時コノトキ殿ト一

人あつくいで徳川殿より打勝りつゝ敵國より攻入りて引返し
ハ味方此不幸なりとぞ云々

杉原白石の城を守りし時此事や伊達政宗
不意に押寄る事有り 政宗此物見の士もせゆり敵ハもつ
まり是りし唯町家より火の用心厳しく唯つりハ物具
武者杉原うとむは城門を開けせ將机おかり
て待居しつゝいひりまは政宗謀有んと恐りて引返し

○前田慶次利大忽々齋と号し加賀利長と從弟なり
一説に利大ハ瀧川儀大夫が妻懐胎し離別し利家の兄
藏人小塚し前田家より生るとり

前田の家を立去る

利大ハ文學を嗜みさほぐ藝も達せり滑稽あり
世を玩び人を輕んぶる利家教訓せし事度
及べり利大息つゝたゝ萬戸侯より心よまらせぬ
事あまバ匹夫より出奔せんと獨言せしが耐利家
茶奉るべきしつゝ悦びく茶次が許し来られ
小茶次水風呂よ水を十分よりきかかき湯風呂の
入りんやと横山山城守長知をもくし利家よりあん
と浴所よむ茶次自ら湯を拭くよとんとハ利
家何の心もなかくあはれよと寒水をきかきり利
家馬鹿者よ欺まらば引來まていもまらば慶次松風
とり逸物の馬を裏門より引立させ置くりハ打棄

奔^{ウツリ}一々^{ウツリ}とど^{ウツリ}又京^{ミヤコ}まで夏^{ナツ}の比馬^{ヒウマ}を川^{カハ}入^{イリ}よや^{ウツリ}たり馬取^{ウマトリ}
の腰^{コシ}よ烏帽子^{エガウシ}を付^{ツケ}させ^セり道^{ミチ}ま^{ウツリ}く往來^{ウライ}の人^{ヒト}立^タと^{ウツリ}り
あ^{ウツリ}と^{ウツリ}き^{ウツリ}と^{ウツリ}り^{ウツリ}き馬^{ウマ}あ^{ウツリ}ま^{ウツリ}バ^{ウツリ}誰^{タレ}の^{ウツリ}ふ^{ウツリ}て^{ウツリ}と^{ウツリ}問^トふ^{ウツリ}則^{スナチ}烏帽^{エガウシ}
子^シを^{ウツリ}忌^キ足^{アシ}拍子^{ヒタツシ}を^{ウツリ}あ^{ウツリ}ま^{ウツリ}く^{ウツリ}此^{コノ}鹿毛^{カダケ}と^{ウツリ}ハ^{ウツリ}あ^{ウツリ}う^{ウツリ}い^{ウツリ}ち^{ウツリ}あ^{ウツリ}つ^{ウツリ}う^{ウツリ}い^{ウツリ}皮^カむ
りぬ^{ウツリ}茨^{イハ}ぐ^{ウツリ}く^{ウツリ}鐵^{テウ}甲^{コウ}鶏^{トリ}の^{ウツリ}と^{ウツリ}り^{ウツリ}さ^{ウツリ}る^{ウツリ}立^タる^{ウツリ}ぢ^{ウツリ}り^{ウツリ}前^{マヘ}田^タ芝^シ次^ジが^{ウツリ}馬^{ウマ}
み^{ウツリ}く^{ウツリ}と^{ウツリ}幸^{カウ}若^{ワカ}の^{ウツリ}舞^{マユ}を^{ウツリ}謡^{ウタ}ひ^{ウツリ}く^{ウツリ}引^キ通^{トホ}る^{ウツリ}見^ミる^{ウツリ}人^{ヒト}の^{ウツリ}向^{ムカ}へ^{ウツリ}度^{タビ}と^{ウツリ}ふ
かく^{ウツリ}と^{ウツリ}く^{ウツリ}と^{ウツリ}なり

上杉景勝^{ウヘスギカゲカヲ}又^{ウツリ}仕^{ツカ}へ^{ウツリ}たり

初^{ハジメ}く目^メ見^ミさ^{ウツリ}る^{ウツリ}時^{トキ}土^{ツチ}大^{オホ}根^ネ三^{サン}本^{ホン}基^キ居^イる^{ウツリ}ぢ^{ウツリ}り

朱柄^{シユヘ}の^{ウツリ}鎗^{ヤリ}を^{ウツリ}持^ツせ^{ウツリ}り^{ウツリ}何^{ナニ}ゆ^ユと^{ウツリ}と^{ウツリ}咄^{トガ}む^{ウツリ}ふ^{ウツリ}父^{フツ}祖^ソより^{ウツリ}持^ツせ^{ウツリ}来^キり
し^{ウツリ}し^{ウツリ}水^{ミヅ}野^ノ藤^{フジ}台^{ダイ}海^{カイ}並^{ナラ}塚^{ツカ}理^リ右^{ウチ}を^{ウツリ}り^{ウツリ}宇^ウ佐^サ美^ミ弥^ミ五^イ右^{ウチ}を^{ウツリ}り^{ウツリ}藤^{フジ}田^タ森^{モリ}右^{ウチ}

備^{トシ}門^シ年^{ネン}久^クし^{ウツリ}く^{ウツリ}朱^{シユ}柄^ヘの^{ウツリ}鎗^{ヤリ}持^ツせ^{ウツリ}ん^{ウツリ}事^{コト}を^{ウツリ}望^{ノゾ}み^{ウツリ}や^{ウツリ}せ^{ウツリ}と^{ウツリ}も^{ウツリ}許^{ユル}され^{ウツリ}ば^{ウツリ}
然^{シカ}る^{ウツリ}ふ^{ウツリ}小^コ芝^シ次^ジを^{ウツリ}制^{セイ}禁^{キン}あ^{ウツリ}る^{ウツリ}バ^{ウツリ}四^シ人^{ニン}と^{ウツリ}も^{ウツリ}も^{ウツリ}許^{ユル}さ^{ウツリ}る^{ウツリ}ゆ^{ウツリ}へ^{ウツリ}と^{ウツリ}訟^{ウツリ}へ^{ウツリ}く^{ウツリ}
許^{ユル}さ^{ウツリ}る^{ウツリ}り^{ウツリ}直^{ナホ}江^エ山^{ヤマ}形^{カタ}又^{ウツリ}攻^セ入^{イリ}引^{イリ}返^ヘさ^{ウツリ}る^{ウツリ}時^{トキ}最^{モト}上^{カミ}義^{ヨシ}光^{ミツ}大^{オホ}軍^{イクサ}ふ^{ウツリ}て^{ウツリ}追^{オウ}
う^{ウツリ}け^{ウツリ}洲^{スウ}川^{カハ}ま^{ウツリ}く^{ウツリ}軍^{イクサ}有^{アリ}り^{ウツリ}小^コ義^{ヨシ}光^{ミツ}旗^{ハタ}本^{モト}を^{ウツリ}ひ^{ウツリ}く^{ウツリ}切^ツて^{ウツリ}か^{ウツリ}り^{ウツリ}合^{アヒ}戦^{ウツリ}
敷^ス刻^{コク}よ^{ウツリ}及^ツび^{ウツリ}く^{ウツリ}る^{ウツリ}上^{ウヘ}杉^シ勢^{セイ}引^キ取^ケ兼^{カネ}し^{ウツリ}る^{ウツリ}バ^{ウツリ}直^{ナホ}江^エ怒^{イカク}く^{ウツリ}り^{ウツリ}大^{オホ}将^{シャウ}
と^{ウツリ}して^{ウツリ}此^{コノ}口^{クチ}よ^{ウツリ}向^{ムカ}ひ^{ウツリ}か^{ウツリ}れ^{ウツリ}を^{ウツリ}と^{ウツリ}る^{ウツリ}事^{コト}口^{クチ}惜^{シヤム}き^{ウツリ}よ^{ウツリ}と^{ウツリ}く^{ウツリ}ゆ^{ウツリ}へ^{ウツリ}怒^{イカ}り^{ウツリ}
々^{ウツリ}と^{ウツリ}よ^{ウツリ}芝^シ次^ジ馬^{ウマ}の^{ウツリ}前^{マヘ}よ^{ウツリ}立^タち^{ウツリ}あ^{ウツリ}さ^{ウツリ}ぐ^{ウツリ}り^{ウツリ}爰^{コノ}ハ^{ウツリ}と^{ウツリ}れ^{ウツリ}よ^{ウツリ}ま^{ウツリ}う^{ウツリ}せ^{ウツリ}ら^{ウツリ}れ^{ウツリ}ゆ^{ウツリ}へ^{ウツリ}と^{ウツリ}
い^{ウツリ}ひ^{ウツリ}と^{ウツリ}と^{ウツリ}敵^{テキ}味^ミ方^{カタ}あ^{ウツリ}ら^{ウツリ}み^{ウツリ}合^{アヒ}さ^{ウツリ}る^{ウツリ}そ^{ウツリ}よ^{ウツリ}馬^{ウマ}を^{ウツリ}あ^{ウツリ}ら^{ウツリ}げ^{ウツリ}り^{ウツリ}杉^シ原^{ハラ}常^{ジョウ}
陸^チハ^{ウツリ}先^{セン}陣^{ジン}よ^{ウツリ}る^{ウツリ}種^{タネ}々^カ島^{シマ}の^{ウツリ}鉄^{テツ}炮^{ポウ}を^{ウツリ}下^ゲ知^チり^{ウツリ}く^{ウツリ}る^{ウツリ}が^{ウツリ}芝^シ次^ジよ^{ウツリ}り^{ウツリ}立^タ
て^{ウツリ}か^{ウツリ}ら^{ウツリ}ま^{ウツリ}よ^{ウツリ}と^{ウツリ}い^{ウツリ}へ^{ウツリ}を^{ウツリ}馬^{ウマ}よ^{ウツリ}り^{ウツリ}飛^{トビ}下^ゲり^{ウツリ}り^{ウツリ}芝^シ次^ジ其^{ソノ}日^ヒの^{ウツリ}知^チる^{ウツリ}ハ
思^{オモ}ひ^{ウツリ}物^{モノ}具^グよ^{ウツリ}狸^{リス}々^カ皮^ヒの^{ウツリ}羽^ハ折^{オリ}を^{ウツリ}着^キ金^{キン}の^{ウツリ}い^{ウツリ}く^{ウツリ}る^{ウツリ}此^{コノ}珠^{ジュ}数^ズの^{ウツリ}ふ^{ウツリ}る^{ウツリ}金^{キン}

の瓢箪付しを襟まかけ山伏頭中まで十文字の鎗を持
黒井馬の金の山伏陣中かぐせ唐鍬うけしり前田孝次と名
乗るかりりるるる水野菰塚守佐美藤田四人も同く鎗を
引提げおあたさけん念なく敵を突退けしり杉原種之助
鉄炮二百挺小高た西へおあげうせし物うれせしりば
孝次下知しり引取り

慶次指物祈り又大おへん者とすしり小人をあやうし
事よといへを孝次汝らちハ武邊とよしりやうしり落
ぶましく貪るるるバ大不辨者といしりごと戯しりしりや
上杉家祿知削らましり度士多く暇を取立去るる孝次を
七八千石一万石を以て揺く大名あり孝次これ此度の乱は諸大

名表裡の心見限しり景勝あてどしが主君とすべき人なり
扶持しるるるきまよしり五百石の祿よく民間より込風月を
樂しみ歌學よ心をあせ源氏物語を講じて世を終ましり
○上泉主水憲元ハ甲斐の武田他家よく劍術の上は一永伊勢
が弟なりちまされるる者あるる京北相國寺の内は洛ぶま身
をま居しを秀吉の時直江景徳の供して京よりしり傳
へて對面しはぬぐ上泉をりてなり會津ハ遠國あるるど
景勝三千石の祿あてせんとなりしり上泉かゝるるまよひ
もよぬ詞を羨しりして仕へたり直江出羽より押入時上泉も三千
五百の將しり最上方は山の上より幡屋まで二十四ヶ所に出
城を設けしり直江ハ真直よ山形よすしんで攻しりんと謀り

幡屋より春日右衛門よきみある者のかへり忠せん事をいひかへる直江悦んで山形よりすむ兵を押し止め山路より幡屋よせんといふ軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣を以て幡屋よき先惣軍ハ山形より攻入るべしと敵我の利をあへん嶮岨よきびき入其ひまよ山形の要害を能せん謀とていへも直江のゆより杉原と中よりいざれば我ハ唯易たよ就んとく崗入むやうて幡屋を取囲む一時攻め兼破るなり一説は長谷堂より内通の事をいひ送るれば直江大に悦びたるを杉原長ハ赤松円心が白旗の城より新田左中将を欺きて謀ありかくいへり山形ハ要害をかへん謀なり只山形より攻入るよきとていへも用むる長谷

堂は押寄より内通の事ハいさなり直江欺き

とていへり

そより出城を只一日れ中よ二十一ヶ所攻落しはる山形は押寄んとり上泉が云山形ハ勝りて要害よく西南ハ沼たり東北ハ石壁よく柵の木七重を矢倉二十餘所よかき且義光ハ先祖より数百年此地よ有士卒よ抱たしる者多し力攻めハとひもよる所々の小城数多攻取しよ勇氣を示し軍を返さる事然るべしとて直江あざ笑ひ軍をせしハ山形を攻んとめ今更山形の要害よきバとて引退くややあは浅黄志る人の差物さく利根川二本木ハ先陣せしまはより関東よきを俾し浅黄志る人を指もの

なりとてつゝしるふも覺るぬ事をいふと罵られ上泉口惜ま
事ありとぞひそり直江ハ進んぐ菅沢山陣しり此延も長
谷堂より十九町あり義光も二万餘の兵をひきよ山形を去る
堂の山北尾崎稲荷山陣を長谷堂よは山形の加勢も来り要
害よけれバきやまぐ攻ぐし討くゆくの軍ハ危しと制する
大風右衛門二百討まぐ切く出上泉が陣は向ふ上泉大勢あぐ
押つみあまきと戦ひくもが大風僅し打あきき切ぬけく
城よ入る伊達政宗も軍を知り先陣長谷堂の城下よ押来り陣
を取しり直江ハ大風を討得ざるも残多し此城を唯一時よ
破まると下知し城際よ攻寄しり直江すたあし打上り石火矢を
透間もあぐ打あぐるも尺千雷の落かぐるが如し志村伊豆延越

前ををき遂と追ひし相戦し其日も戦ひ暮し
く直江又三千餘を城の後北山の上らせ鉄炮を打かくるバ城
よりと切く出死場敷をまぐ直江軍兵をまぐ四方を焼く
しつたを所より軍あり長谷堂の城下よ大なる池谷を堰あり
て水をせき漕へしと覺しつたもバ物見の兵を遣し又一陣を
焼くしつた城中よりひつ曹八百討切く出しつた直江使を
引るまきと下知すれどもつみ合く引退し使もあしつたり
帰らざるもバ次第小軍兵行重し銃炮を打合くもバ直江杉原
ふとく軍を引上らまると云上泉我こそあめとつてハ杉原進む
ハ年若死人の業引揚るハ老年の我は協ひしつたり同心せざる
よ上泉存子細のふとつひもあぐ馬を奪あしつた組よ付

らまう大高七左衛門馬を兼付上泉を引くも士大将の只一騎
よくかけゆるやうやある有べくもなるといへども耳もや人ど
まバ大高もついでに前田次守佐美民部上泉が陣より一陣の
大将敵より入るをよそふひえりハ士の本意は非ざりながら
まごつとていども進むもその刃をさしつゝ前田をさしめ二十騎
たより駐向ふ上泉大高八馬ありちり立向もあつて鎧を打入
突合しつゝ念たう敵を突退け引取んとする所は政宗の兵六三
百計横あひより切つてあつて上泉兼て直江が祠を怒り
しりしあは一足も引かずとていひ定めしむバ又合戦を始め火
出つては戦ひつゝ敵味方付も考多し前田守佐美を始め
大剛の者ども数度切つていへば政宗の兵三千餘人付つて

たかゝるまは政宗の士大将石川弥兵衛崩る味方をりて
又打つては前田已下立つていへばつていへば戦ひつゝ
直江日も暮かり進みつゝとていひとれと下知しつゝ上泉は
といひ捨て敵に向ひ上泉主水といふ剛の老打取ると名乗が
け死狂ひに數十人切伏終つていへばつていへば討死しつゝを首を八金原
加兵衛取つてつゝ上泉三十四歳とちや上泉主水と曹の真向は
琮嶽いぞとつゝ是より上杉勢乱れ立ち敗北しつゝ義
光政宗勝つていへばつていへば追つては芋川縫殿村上國清四千計
横合よりかゝると陣を整へひつゝをいへばつていへば
又えつ返して追立てつていへばつていへば物よりれきて石坂共五郎夢沼日向
前田次守佐美父子物具は立向の箭各七ツ八ツ折つて鎧を

突ゆがめ刀ハハカささらのめく斬なり人馬ヲ殷よそそそるが上哀
ガ組の叩へる前を棄通よそそ各大将主水をすて殺しをのこれ
交リハあるべく大高七左衛門の士なりと罵アそく打るる
答ふ人なりりりり

○慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を問者
よそそくおろりを伺まそそ松川ハ阿武隈川の枝川よそ伊達
領の境たれば本条出羽守甘粕備後岩井備中杉原常陸栗生
美濃岡野左内五千計よそそく政宗ハ國見時を諭信
夫郡より瀬の上北川を渉り五千の兵よそそ梁川の城を押へ
松川をさして押寄る物聞ども斯く告まば本条出羽城をさ出
川を渡してや戦ふ川を前よそそ半途をや打んとつあそよ

松木内匠敵不意の利を謀て押寄り味方川を渡して待たけ
あば政宗よこひよこぐのく必引退くべらあり川を渉らんを
よろりたあとりあふ栗生同心をば此川中窪よそ極めて渡は
事きやほくは政宗よこそ人処を半途を打つ利あそ人岡野
のやこ敵大軍なり爰よ待んハ敵を恐るよ似そり勇士の
志よ何はばとく川を渡して待設せんよ栗生孫子よ少
合衆是見北とりつあり小勢よそ無謀の軍せんハ大敵の擒
とあそんハ必きなりとりあそふ甘粕備後杉原常陸もをせ来
りよ物見をせよそ楮侯主膳本庄段右衛門井筒小隼人
兼行く弛帰る楮侯ハ政宗川を渉らんとつよ二人ハ政宗川を
渡さん事半時計りやあそんとつ子細を問よ楮侯敵馬の香を

取む障泥をそぐさば羽壺を常の如く附くとり井筒本庄
が云我ホス」スガコラ 亦も回くみされども政宗いづこ来らば其間五六
町計もやららん政宗川カハナハ 際ハ 押寄て其支度せん何の時刻を移
さるべき且小荷物を遠く引退これバ戦ひを拵く敵なり政宗
二萬の軍兵を帥く寄来り空しく引退るやうやんとりあさる
バ川端二町計を並く陣を整へく敵を待んとりあさる岡野ハ切
支丹を信する人なり南蛮人の贈りたる角栄螺とら曹を
署真先くけく川を打渉きて粟生甘粕川を渡るべしと
下知はともども布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門等ニ
勝計をいづる川よき入打渡きて宇佐美民部鎗を拵く
める兵をば押とめてりりかきバ政宗押来り先陣片倉小十

即透間もあく切てかゝる岡野四百計を丸ありく鎗を打入
面もあくあきたきけんを戦ひくれども大軍小取かき左
内僅小打あさる切ぬけく引退く北川馬の首を立直し小田
切は向て唯今付死せん會津もあし十四歳ある吾子を囑す
よ是をかきみ又送りくさるりいへく握る皮の羽折を脱で
小田切は渡りくさるバ小田切若万死し一生を得たはたし送
りくべしとて羽折を腰よきまきり北川今ハとひ並事ありと
て追くる敵の中よかけ入く切死しりくさる是をいへめとじ
く帰し合せ火を食ひく戦ひくさる討く者多し政宗勇く
進んで追うけくさる小岡野握る皮の羽織もく鹿毛ある馬
小乗り支へ我ひくさを政宗馬をかけさせ二刀切る岡野あり

顧て政宗の曹カネ此真向マコトより鞍ウツの前輪マエワをうけく切付キレかへん太刀タチの
曹カネの志ココロを半ナうけく研キリをらふ政宗刀カネを打折ウチオリくくまは岡野オカノ
すうさび右の膝口ヒザグチに切付キレく政宗の馬ウマ飛退トビノケてくれは岡野オカノ政
宗の物具モノグ以外の外見オホミ苦クしくりく大將オホシラとハハひもよび續ツグいて
追詰オヒツメぶりーが後小政宗コシマサなりとゆき今イマ一太刀ヒトタチのみ討取ウチトルべきふ
とて大に悔クハシくあり岡野オカノハ川へ乗入ノリイく小政宗コシマサ又十騎
耳ミミあき追オヒうけ来キてきこまひとせし呼ヨボりりくまは岡野オカノあり
かへりく眼メの明アキく剛カウの者モノハ多勢オホセ中へかへさぬのぞとい
ひくはよるを乗上ノリアり宇佐美兵左衛門ウサミ十六歳ムナ松川マツカハの向ムカひ
の岸キシわく危アヤシくんくバ父チ民部ミンブ馬ウマを川カハ小折コオリ入り栗生クリノい
は先サキハ川カハを涉ワタる者モノを止とまらまが何事ナニコト小渡コワタり名將ナシラ

の宇佐美駿河守ウサミの子息シヨクははりよと向ムカふ民部ミンブ謀マカフも心ココロより知チん
あまこんくは一子イチゴれ兵左衛門ヘイサエ向ムカの岸キシわくをやうくまぬべく見
ゆきバ心の乱ミダくくそやとひも終ハシらば川カハを涉ワタりお連オネて引
返ヘり栗生クリノハ陣アレイを整トシへく待まちけくまは片倉カタクラが軍兵イクサを追崩オヒクし
川カハ又追オヒひくまはされども大軍オホイクサ入イる内ウチよ重オモシく攻オセまらば上杉ウエサチ勢
ハ福嶋フクシマをゆして引退キレく福嶋フクシマよむく行程イタビめあつ政宗シマサ引ヒくてもあ
まはちと馬煙ウマケリを立テて追オヒうけく物具モノグを道ミチに捨スツる事コト敷カキを志
らば息イキきれて行倒イキタラく者モノもあり持鎗モチヤリの長オホた柄エハち堪タか
くく多オホく捨スツるくく青木アヲキ新五郎ニイノ永井善左衛門ナガキを
永井善左衛門ナガキハ世ヨ々徳川家トクヱノに仕シへり小田原コタハラの城カサを囲カサり
後ノチいづるあま有アリく蒲生氏郷ハハシに仕シへ其後ノチ上杉家ウエサチに奉ホウ

公トク一ヒトりヒトもヒトもヒト剛ツヨクの者モノもヒト奥州福嶋口アヅマフクシマノクチでも物見モノミ
よ只一騎ヒト出デたりヒト一ヒト伊達政宗イダテマサムネの伏兵フシヘイ六人ムツヒト起オコりヒトてヒト包ツツきヒトを
四人ヨウジン討取ウチトルたりヒト長祿ナガシユもヒトもヒト太刀打タチウチヒト一ヒトくヒト首カビをヒトなヒトるヒトが右の
指ササ手テ負ヒ刀カタを取落トリオチせヒトるヒト取トルるヒト敵オトコを追結オツメて又討ウチたヒト
あヒトの物師モノシなりヒト其ソノ後ノチ其ソノ疵キズをヒト問トハ馬ウマふヒトくヒトしヒトりヒトと
答コタへヒト一ヒトもヒトぞかヒトのヒトどヒトくヒト功コトふヒトあヒトるヒトぬ人ヌヒトなりヒト後御旗本ノチノオモハタ
歸カりヒト仕シへヒトくヒト御旗オモハタをヒト司シりヒト善左ゼンサ浪人ナガシもヒト上州深谷ウヅマフカヤ
又閑居オノオノして有アりヒトるヒト時人トキヒトのヒトりヒト一ヒト瀬戸セトの茶入チャイロをヒト秘藏ヒサウせし
小下女コゲメ落オチりヒトてヒトお破ヤブりヒトぬ下女ゲメ驚オドロたヒトくヒト鏡キヨウ臺ダイより
五倍子ゴバイシを入イれヒトるヒト壺ツボをヒトなヒトしヒト一ヒト是コノもヒトかヒトらヒトりヒト小奉コホウらヒトんヒト
り用ヨウもヒト立タぬヒトのヒトなヒトまヒトもヒト是コノをヒト精取セウキしヒトぬヒト後ノチ小堀コホリ遠トホ

江守エノミ見ミてヒトをヒト打ウチくヒト是コノハ唐物カラモノの肩衝カクツツなりヒトと柳ヤナギ美ミ一
後ノチよ公オホノミヤ小奉コホウらヒトんヒト板倉イタクラ勝重カチシゲ怨ネありヒト一ヒト六ムツヒ 将軍シャウコン
家ケ子コ御ミとヒトりヒトをヒト中ナカさんヒト御上京ミヤウキョウ北キタをヒトりヒト京キョウへ来キらヒトまヒトすヒトと
いヒトひヒト越コえヒトりヒト一ヒトは深谷フカヤをヒトぬヒトくヒト平安ヘイアンよヒト舞マユくヒト時浪人トキナガシなりヒトとも
あヒトひヒト多オホりヒト名護屋ナゴヤは親族シンゾクのヒトりヒト一ヒト立タちヒトあヒトるヒト像シマヰはヒト俱トモあヒトひ
ける浪人ナガシ巴サ刀タチをヒト永井エイが指サシ替カへヒト刀タチをヒト取トリ替カへヒトかけ落オチりヒトぬ
永井エイせんヒトうヒトとヒトあヒトくヒト京キョウよヒトとヒト後死罪シサイの者モノ有アりヒトるヒト小弑コシんと
て刃イをヒト付ツけヒトるヒトふヒトさヒトびヒトてヒト金色カナシロもヒト見ミえヒトるヒト研師ケンシ刃イをヒト付ツ
く此コノ刀タチの如ゴトシ刀タチ此コノ刃イ曾ソノこヒト心ココロよヒト覚オホえヒトぬヒト斬罪ザンサイの場バで
ふち身ミの者モノ有アりヒト切キきヒトりヒト一ヒトかヒトの永井エイがヒトさヒトびヒト刀タチあヒトく
切キりヒト一ヒト物モノは障サハ事コトあヒトらヒト似ニたりヒト能ヨク研ケンくヒト刃イはヒトバ

はるまじり物ゆく銘ハ正宗と切り本阿弥と見すれ
ハ正宗の中ゆもすふ最上の物なりといへり是も 將軍
家子奉りて永井正宗と号せられしなり

始とて大剛の老も馬を召しハ追ちりてつとて
てい突ちりて後殿しあり青木ハ小丈あるるふ氣柄の短き
鎗ありしを殊と云ふさざり幾度となく支へ戦ひたり其相備
後ハ上杉家より勝まり勇將あるが白石の城をせりし會
津へ行きりし跡ゆく登坂逆心ゆく白石を敵に取まり事
を口惜く思ひし今日とりと見せし引けり取てかへて
追退け勇氣をあらしめ福島の城下は川を渡り時政
宗の兵跡追詰りて先ず川を打入るるが永井を後よ

三刀切る永井度々の軍は戦ひ疲れ大軍打渡りて川音ふま
まれ此をあらば青木ハ鳥毛此棒のゆゑゆく黒たむらうけ
しるが氣あしく敵を追拂ひ川岸に打あがりて永井は斯や
いんぞ驚れ多く従者よんすまばあろふ三刀鞍ふも刀の痕あ
り永井は六助けらるしとして一禮をぞ述べりたる小田切を
敵にえ圍まありや討たぬと云ふを青木又かけきて敵を
追拂ふ岡野ハ旗ゆりありて静に福島の城に入其粕栗生も引
入りてバ政宗やがて押寄しるふ殿に兵ども柵を踏み城に入
りりし青木ハ柵を越りて只一騎ひうへ居るるふ政宗馬
を駈きりし青木十文字の鎗ゆく政宗は曹の立物三日月を
突折しりば政宗馬は諸鎧を合せりわけ通らまぬ青木は

政宗と争ひて今一鎗ゆく突殺せしむる口惜き事ト云ふ
りるかゝるまゝは築川の城より須田大炊助長義討つて政宗の
兵阿武隈川を前陣に置るが此川奥州第一の大河あれども
須田ハよく地の利をとり兵を二陣にこらち須田ハ川上ホホ上
アツクををりて政宗の兵二ツホホカまて防がんと色めくをを
文字不渡しと斬る敵敗北し物具を始め多ク分
捕せし中ハ伊達家ハ侍へ幕を須田宇平次中村仙右
重奪取てり須田今年二十三のまゝり武名殊ふ世高
く閑えたり政宗ハ松川ゆく後敵出たりと引退く怒を
本庄越前又かけゆく川を渡し追うけくまバ政宗敗北し信
夫山に掛り引退く時景勝後巻小打出く緋地は日の丸に

旗山の上に見えり政宗も物もとり仙臺小引退き
まかり後小政宗使を以て攻取る白石の城と幕と取換ん
と云送らるるは景勝ゆく白石の城ハ鋒ゆく攻められ
幕も亦吾士卒の骨折る取得らば重く幕をも鋒めて取返
し事よと答らるる後小城一ツ攻落さるるハ恥あるは昔
より名將も城を敵に攻落さるる事あるはあはれ武具を
取まき事ハ弓箭とる身の大き。恥たれば政宗我をまじら
アツク斯云ふと笑はるる
台徳院殿上杉の館に
御出有し時かの九曜此幕法華經の幕を厭はるるれと
ぞ其後政宗岡野よまきり時松川の軍に有松語とせり
く汝を斬つるハはあはれおをといはるるは園野大將の

刀の跡と存りて金糸よて縫あをせ家の室とせんと存るよし
いひく羽折を改字よ見せられバ政宗悦む其時岡野曹の志
ころを吹返しけくなぐり切はちりきと申すバ政宗色
を變り物語を止らまうと云や

岡野ハゆや蒲生家の士なりしが上杉家よ仕へたり富
有ある人少く儉を好む奢をゆくむ一月の間二三度も金
銀を山の如く積て其中よ即くなぐりきと申すをゆや
人そよとあへり或時岡野より此如く金銀を並べて見
居しりし近きゆりの士あはれしを志知し方人の者
どもあまのくかけあてたまはれし岡野ゆやのあや正宗此
刀を授てまはれ一日一夜其家よ有る事能りあつて

て帰アたり留聖が馬取の下に大板金一枚持たりと云
及び呼出して汝が志こそゆく事人ハ貴賤よあはれ
貪くしてハ義理のたのむべき事も心をうりまて叶ひて
よく心づけしと云て黄金百兩與へたり景勝會津よ
兵を起す時永樂錢一萬貫文を献り朋輩の親よ深き
人まふハあはれ黄金をとり送りたり軍のまはる人ハ
ひりめたるも岡野ハ様樂よ舞をいれしと云はれ人
よ語アて日比ハ武備よたてしと云はれ様樂も世の由り
時ハ諸方よまはる暇たり今人々あはれきと云はれ
者どもいしはあまの玩よまはる事よ軍小臨む者生て帰
らんと思はれされハ今生の樂よと云はれ

ぞ云々又政宗福島フクシマの城を攻とらん中て木幡コハタ四郎左馬
百騎討ふ城近チカく働ウツきたり岡野井樓セイロウより見大物見
あまてい三陣サンジンより入りて八軍を心懸ココロカケり兵をせむ
らばといひりて小鈴木彦九郎スズキヒコノよせ来り中て政宗有べ
くひとめく討取んといハバ旭ヒヨトモとて兵をせ先陣二十騎
計次ケイジの陣マひひりつふなるといめく西を鉄炮テツポウを打ち煙
の下ノあて左内サナイ一文字イツモンジ切て掛カて遂ツよ木幡コハタを討えくれ景
勝度カトタの功を賞ウツし謙信武功ケンシンブコウの輩トモ小姓名コナナをあへらる例
あより左内サナイを越後エチゴと更められり政宗三万石よてまひり
まうらども奮主ケンシュの好ヨシと忘ワスまがごとて蒲生秀行カマフヒデユキ仕へ猪
苗代ナボの城シメツケ有下野守忠郷タサトの時死シりて金子三千両正宗

の刀カタを遺物ユイモノ小献コケント忠郷タサトの弟イモ中務ナカノツメも金子三千兩景光
此刀コノカタ貞宗サダムネの小脇指コワキサシをかきみよめり年頃トシゴロ人ふか
るる金銀キンギン此手形テカタ證書シヨウシヨの大オホ箱ハコふありて皆焚ヤキまじり
しりしと我

○関ヶ原セキガハラの亂ミヤウラをまはりて後 東照宮トウショウミヤ本多正信ホンタマサノブを召メシて石田イシダが
子妙心寺コミョウシンジ此内永壽院コナノトキヨウインが弟子デシあく僧ソウとなりて寺中ジチュウ一因イツインて
重罪オモシの人ヒト此子コノコあまていも幼き時コトより出デたれり者モノあれバ救ユクさ
まじりといふいふと仰オホ有アりて正信マサノブとてあも御救ミユクされの有
べき事コトよ治部チブハ徳川トクヱンの家イヘは大功オホコトをたれり者モノあり治部チブよ
しまた軍イクサを起オコし西國サイコク中國チウコクの大名オホナをかきひひりて一戦イツセン
もあ負マカりて故コトあて日本ニホン六十餘州ロクジュウ皆徳川家トクヱンに帰服キフクし

治勢が存立しよりかく日本ハ從ひぬまきバ徳川家ノ大功を
成さるハハハハハヤトキタマヒバ 東照宮汝が理屈もさるる
なりと仰らまはるかの僧御ゆゑこれを蒙アられバ岡谷美濃
守宣勝懇よして和泉北岸和田まで終りたるや
○関ヶ原の乱此時越後小一揆起巴堀左衛門督秀治が臣小倉
主膳が下倉の城を責る堀監物が子丹後守直寄坂戸の城
わくかくとや後巻よかけ向ふを敵引とがへて坂戸を攻ば
如何あんと云りの有直寄いまぐ下倉を救はば敵此城を
攻来らば敵此旗先をさるふんぞ口惜くもべいと云ありを
やく打出と下倉向へバ小倉も門を開て切く出直寄後あり
一文字ノ突あり一揆此長田丸右京を打取ると此告を坂戸

あて書きたる附勝利を得んとすむせらばいふあんとりあふ速
あざあひ打まけバ戦場の土とあらしよと云く出まきと一揆
柿崎齋藤已下五千計杉山より前平田をめて陣くれ
バ直寄昔太閤の前もく允長老の孫子をやとるをゆゑ兵
以正合以奇勝と云り吾々奇を以て軍とべいとて山中數馬
速水織終よるを渡り直寄ハ六百計引分る林の中
待居り一揆馬印をさる進て来る時林の中よりつとを
出速も真先よすみく思ひもぬ不意を討一揆二百作
討取く切崩しと東照宮御感状を賜ふぬ此年二十四才
とや後小十方石を賜ふと

直寄ハ秀政の長臣堀監物直政の次男あり十三歳まで倍臣

なまじり太閤タカウの小姓コシヤウ召メせられ左右サイウをももまじり寵臣チュウジン之
初ハジメ三十即ソウジツといひりるが後丹後守ノチノタニシと称ナヅケされ太閤ある時茶室チヤシツふ
入イて火ヒをとりの炭スミを入イる時千利休チリキウが幽霊イウレイあゝらまじりて黒クロた
頭巾カキンをかぶり爐ロのかゝる座ザ居イるが眼メの中ナより先生シヤウシヤウ
息イキは火ヒを吐ハく左右サイウは有アる侍女ジヤウオウ恐オソまあへるも太閤炭タカウスミを入イ
終オハりて無礼ブルイなりとてさうとていふまじりて利休リキウが形退カチシヤキて坐マ
す太閤常ツネの居間キマは出丹後守デタニシをよんぐむけ拍敷ウチキの屋ヤは有ア
志シくり来キてといふまじりて直寄ナホヨリ今年コトシ十五歳ジュウゴサイなり即ソウジツ行イ時
廊下ナウカの窓戸マドを閉トめてすき屋ヤに入イるまじりて何ナニもさ
歸カヘてく斯カクといふ羽折ハヤリをあゝらる利休リキウハ茶の湯チヤユを好ヨクく
世ヨ小名コナあり天正十八年テンシヤウジツ秀吉南禅寺シウキクナンゼンジより黒谷クロヤへゆらる

山ヤマぎハの道ミチよく女房メウバウの下シモ終ハジメよりとて持モせし花ハナをたが
めく静シズカふ来キてが秀吉シウキの先サキをひの者モノを思オモく花ハナの木陰キヨウは
立タかきまじりていふけなく美ミ麗レイなりて松マツ向ムカふ利休リキウが女メ
房バウ、鴟トビ屋ヤは嫁カへ今イマハ獨住ドコヂある由ユゆきくお仕シへさせよと志シひ
てよび出デていふ夫ウツよりいふ後ノチ悲カハしその涙ナミダ乾カラくはとて
従ツグて利休リキウは志シひらるゝ女メを商アヤひしとて人ヒトあはれ
んが口惜クチアワシとていふ秀吉シウキ利休リキウをゆめられし利休リキウ木像キゾウを作ツク
て大徳寺ダイトクジの山門サンモンに置オキて太閤タカウ山門サンモンハ天子テンシを始ハジメとて通トホらせ
る頭上カウサウは志シひする事コト無礼ブルイなり且カウ茶チヤの器キは價アタひ控コウく私シ有ア
とゆゑとて天正十九年テンシヤウジツ二月ニグヒ利休リキウを誅チウせられり利休リキウ小座敷コザシキ
ふ茶チヤの湯ユをゆけ弟子テシの宗巖ソウガンと常ツネ此コノ如ノく茶チヤの湯ユ終ハジメりて

そまづつ小形見をわらちやきて後自害しつゝと哉

直寄幼少の時紙でこ土でこむりまやうの物を玩びく人の贈る

少も他のも此ハ悦びださるバ人ごも贈るもやぶる大なる藤よ

入て有しを人々あやしそむひたる小常人またあふかのでこを

並心武者押陣取をしとて越ま悦びしとぞ

○越後の一揆三条の城又家ある時道は伏兵しつゝ溝口伯耆守

宣勝兵をせしとて三条よ赴くよ世間太兵衛先陣せしが小川

の脇よ新しき糞の有をみて此邊よ兵を伏置しつゝなるとそ

搜しつゝもバ伏兵駭きつゝ逃るるを追うけく百餘人討取しつゝ

常山紀談卷之十六 終



早稲田大学図書館

011688998168